

「……………う……………」

鏡の群れに視界を塞がれたと思ったのも刹那、何処とも知れぬ場所に放り出され、ゴッ
ン！ と固い床に額を押し付けられたランセリイは瞳に涙を滲ませた。

「お前のターンは、もう終わり！ 次は私のテリトリーで勝負をしましょうねえ?!」

背中に乗ってきたヴェジフイアンカが、土下座に似た格好を強いられた少女の首を、ヌ
ルリと青い血に濡れた手で掴んできている。

「は、放せっ！ くっ……そんなに真っ先に倒されたいか……っ！」

肘打ちをやんわりと掌で押えられ、逆に手首を掴んで捻られた。蹴り上がるうとした踵
よりも早く膝の裏を押され、ストッキングの重しをされてしまう。突き上がった小さなお
尻を濃い青紫のオーロラで包んでみせつつ、衣裳を激戦の名残で紺に染めた淑女が耳元で
嗤ってくるのだ。

「アッハ、その通りよっ。私を倒さずして何処かに行けるつもりだったのかしらーあ!? ボ

ーナスタイム。FUCK でよがり狂う本性をもっとたっぷりと暴いてあげるわねーえ!!」

斬糸によって至る所が切られた蝙蝠翼が暴れ、菖蒲色のブラウスの左胸の黒々とした血
痕を叩いたが、悲しいほどに無力なそれは傷口を開かせることすら出来はしない。

(こいつに構って足留め喰らってられない。早く、あそこに戻らなきゃ……っ!!)

昏く淀んだ空間だった。視力そのものを封じられたかのように茫洋としていて、確固た
る物の形を得られない。辺りは薄暗く、足元の床は鏡面じみたつるりとした材質で、立ち籠
めた不快な色の靄が靴を浸してきている。周囲には彼女の身長程もある長方形の鏡が、無
数に墓標の如く林立し、時たま、それらが合わせ鏡になって終端の無い像がズラリと横
に並んでいた。

「そうねえ、大事なシェリスに隠れて、こそこそ私とじゃれてる場合じゃないかもねーえ
?! だけど、ご免なさい、この手の邪魔が私は大好きなの!!」

獲物の胸中の焦りを悟る嗅覚だけが異常に発達しているゾフィアが満面の笑みを浮かべ
て頬をつんつん鼻で突いてくる。心を読まれてムカツときたランセリイは表情を裏側とは
正反対の友好的なスマイルで鑑うと、切れ長の蒼瞳を意地悪く流し目にして後方に送った。

「……ふん、別にいいや、ゾフィアと一緒にいるの好きだし。だけど、へーえ、こんな所
が、わたし用の地獄なんだ。創った奴の安い死生観が出てて、なんだか可哀想。首の手、
放してくれたら、なでなでしてあげるよ?」

「剣で? 心配しなくても、すぐに怖くしてあげるわ。 遊園地 の 幽霊屋敷 も泣

いて逃げ出すくらいにねえ?」

ズズと下から迫り上がり、正面に聳えてくる、夜の湖水を思わせる玲瓏とした逆様の世界への扉。その冷氣漂う鏡面に映る少女の姿は無惨の一言に尽きた。輝かしかった精緻な衣裳は慈悲無く隈無く周到に鋼線で引き裂かれ、生地に幾重にも巻いた笹の葉から、守るべき柔らかい肌と乾いて粗雑なクレヨンの如くなつた血糊を晒している。痛めた尻尾は弱しく垂れ、指は鉛のように重く、前方に投げ出させられた左の握り拳を開いてしまいうになる。脚にも金属の芯を通したような疲労の重量感が伝播し、引き摺るのすら億劫だ。それでも、その藍理石に滾る凶光は衰えることがない。伏せさせられた顔の横に突いた右腕は、無銘の錦銀の柄を硬く掴み、不利な姿勢から反撃の機会を抜け目なく伺っている。「あら、可哀想。莓タルトみたいな美味しそうな傷ねえ？」いきなり首筋の傷を舐められたランセは「ひゃつ」と呻いた。鋼線で作られた皮膚の断面を生々しい紅い舌が這いずる。「色々あったけど私の勝ち……。さあ、何をして遊ぼうかしら可愛らしいお人形さん？」

「こ……の……負ける、か……あつ！」

悍ましさに耐え、精神統一。己の影の更に奥へと思念を送り、全滅から漸く増殖してきていた巢食う者共へ活性化を促す。周囲に円形に広がる暗黒の深淵から、蠢く怪奇を解放

「これ、なーんだ？」

少女の努力を茶化すようにアイシャドーを瞬かせて、ゾフィアが指の腹に挟んで見せてきたのは、数本の釘だった。ブラックオパール的な極彩の遊色効果の輝きを放ち、漆塗りの如き透質感がある事を除けば、太さと長さだけなら何処にでもあるような、ごく普通の光を憎む色に染まって激しく波打ち、今にも内部から突き破られんとしていた目前の大海に、それを刺される。すると何とした事か、釘の先端と黒い侵蝕が融け合って癒着したかと思うと、瘳猛な喧騒が俄に凩ぎ、蠟色に変じただけの元の鏡面に戻ってしまったではないか。影封じのネイル。正式な名称は知らないが、ランセは直感的にその効力を悟った。

(……なんだろう……それだけじゃない……っ、凄く嫌な感じがする……っ!!)

人差し指程度の小さな封具が更に大量に取り出され、裏を見せる革靴の先端にゆっくりと刺し込まれて来た。肉体を貫通される激痛を覚悟して身を縮こまらせたランセイだが、あに凶らんや何時まで経っても痛みは無い。代わりに、X字を並べるように交差させて打ち込まれた釘が刺股となつて働いて、そのX字の下端の隙間で足の指が拘束されてしまった事を悟った。立ち上がろうとして、たったそれだけの動作が既に封じられている。指を動かせず、足の甲が地に接し、爪先から膝までを固定されたのと同様の効果を受けていた。「如何？ たったこれだけで、ぐっ、と身体の自由度が減るのよねーえ？」

一仕事終えた董の淑女が、芳しい少女の蒼い、死香化粧の薫るうなじから手を離す。「……あんまり……舐めないでよね♪」

その油断に間髪を入れず白夜の魔性は付け込んだ。上体を捻って素早く振り向いて、そ

れ単体で相手の喉笛を食い千切れそうな殺意を露わに。才走った蒼瞳に力を籠めた瞬間、

——ゴオオオオオオオオオ……ウウウウウウウウウウウウオオオオオオオオオオツツ!!!

白い焰が燃え上がる。夜の帳の如きドレスから月光が噴き出し、細い銀糸がはためいた。「わたしはシェリスに一杯元気を貰ってるんだ。お前なんか一瞬で灰にしてやる！ この程度で人の抵抗を封じた気になるなんて、今までよっぽど弱い奴と戦ってきたんだねっ!!」

さようなら、と八重歯が尖る。しかし、敵を焼き尽くすかに見えた炎は途中で軌道をねじ曲げられ、排水孔に吸い込まれるようにして影封じの釘の根元に消えていってしまった。

「っ、な……なんで……っ?!」

「あらあら、驚くことかしら！ 呪術の極上の触媒を飲ませてくれたのは、だーれ?!」
そう言つて、鏡に映る銀髪鴉翼の凶鳥がペロリと舌を出し、二本指で摩つて見せた。

「く!! 思い出させるなあああつ、あんなことっつ!!」

「影を掌握された月は変化すること能わず。それはすなわち停滞を打破できぬことを意味する。違つかしら？ 呪術者の眼から見ると、お前は弱点だらけなの」

余裕たっぷりに弄ばれる三日月のペンダント。ならば、と屁理屈じみた意味付けとは無関係そうな身体変化で肘に角を生やそうとし——。瞳の上端を水平に揃えて熱狂の睡魔に委ねた女に、結い上げた銀髪を愉しげに揺らしつつ濃紺の頭飾布から抜いた羽根で身体のあちこちをチクツチクと刺されると、魔力の経脈を断たれて細胞の活性化が止められてしまったことである。

「手の内は沢山、見せて貰ったのよ？ そう簡単には通用しないわねーえ……」

「う、うそ……ちよつと待つ——!」

躍動の残滓である甘酸っぱい汗を吸った鴉の濡れ羽が予想外の事態に狼狽し、凶女の微笑みを映すプレート状の鍔冠が輝きを焦燥でくすませた。熱っぽい享楽の吐息に撫でられた雄牛型の魔角が微弱な電流を流されたかのように震えて警戒心剥き出しに先端を研ぎ澄まさせる。

「お前が理不尽なら、私はそれを包み込む現の霧。私が絶望なら、お前はなあに？ 可哀想な女の子……!」

呪いの言霊を唄いながらゾフィアがランセから長剣を奪い取り、収監された両爪先の間突き刺した。腕く少女の尻尾を掴んで引っ張り上げると、それで両手首を蔓草の意匠が輪を作る罫に縛りつけてしまう。宵銀の鋼板は、剣身と釘がちようど一直線を描く位置に食い込み、蠢動を封じられた影に噛みつかれたまま抜けなくなる。膝立ちで両腕を後頭部に回させられた華奢な骨格の敗者は、これで本格的に身動きが取れなくなってしまう。

「う……にゅぬ……っ!」

Cの体文字を描かされた少女が、極度の切迫感に身を振るのを見て、女が不気味に微笑む。

「自信に満ちたお前に傷をあげる。いつまでもジクジク疼くねえ？」

灰華のフリル重ねのスカート中央、ミーティの細い凶器でぎっくりと入れられたスリットから、妖艶な漆黒に彩られた三角地帯が覗いている。そこに差し入ってきたゾフィアの左腕の横暴な挙措を、顎を胸元にくっつけて下を向き、不快に満ちた目で追っていたランセリイは、自分の立て膝の間、床の鏡面に映っている物を発見して、思わず頬を赤らめた。「鏡よ鏡よ鏡さあん、私の悪戯を待ち侘びている青い果実は、どおこ？」

「にいつ、見るなああつつ！ さっきといい、何度も何度もおおおつ！」

囚われの少女を天地逆に捉えるスクリーンは、写真を現像する暗室の灯りの如く内側からぼんやりと発光を始め、同時に魔性の影を追い散らして、透明な硝子に墨を僅かに混ぜた程度に色を薄める。そうして次第に明瞭になっていく像に股間が露骨に描かれていたのだ。蛍光灯じみた仄かな熱に照らされて、少年的で爽やかな太腿と股座が身悶える。

下穿きは黒豹毛並みの光沢を持つショーツだ。フロントは股下から大して面積が無く、臍の大部分で低い背丈を、閉じた包皮の上まで必死に延ばして、懸命に少女の秘苑を覆い隠そうとしている。全体は腰から中央へ緩やかなブーメランを描いて落ち込んでいて、銀薔薇の刺繍を施されたサイドは、ティアラの如く左右の腸骨翼に引っ掛けて、肉の薄い可憐なウエストをぴっちりゴム紐で締め付けていた。

鏡写機が特に食欲に視線を食い入らせるのは、アダルトな布の船底部。

「ふや……つ……あ、あうう……こ、このお……つつ」

視姦のむず痒い羞恥が脾腹を掻き毟り背筋を這い上がってくる。被写体の少女が僅かな可動部を駆使して腰を動かせば、注視せねば気づかないながらも肉質を早熟に造り変えられたつある陰阜の盛りと、すべらかな臀部の丸みの間で、縦皺の寄った天鵞絨の如き生地が哀れな蕘踊りを繰り広げるのだった。

「恥ずかしい娘。母親の角を折った仇に喜んでこんなサービスするなんて？ でも、それでいいの。無力な女の子はそうやって強い敵に媚びて生きていくのがお似合いよ……」

「くくくッ！ だ、ったら、媚びてるっ分の、ご褒美が欲しいな……つ、んうつ……ん！ 早くこの尻尾解きなよっ、この性犯罪者あ！」

チリチリと鼠蹊部に淫靡の炎が当てられる。

ますます腰振りが激しくなり、鏡張りの舞台でオーバーニーソの膝がキュッキュツと擦れた。ホイップクリームをうつつら塗ったような甘い香りのする首筋や珈琲色の硬い胴鎧から、懲りずに燃え上がった月の焰はしかし、見立ての呪縛に囚われる。冷凍室から漏れ出す氷温の靄の如く黒衣を降って釘孔に吸い込まれて奮励諸共に無に帰してしまい、ただただズシリとした疲労を蓄積させていくのみだ。船乗りの熟練技じみた複雑怪奇な固結びを緩めようと、もぞもぞ動く尻尾は、にっちもさっちも行かない。

「やあだ、メインディッシュを繋いだばかりで、それは酷いわ？」

ミニスカートの内で跳ね狂う秘座は、さながら暗天を往く小船。黒布の足口から生えた内腿から、權の如く伸びた筋をあやすように撫でられると、ゾワゾワと背骨が凍え、グラビアアイドル顔負けの開脚膝立ちを強要される活動的な脚線が体筋を目一杯使つて震えてしまう。

「い、今に見てる……鑑賞料を、お前の命にしてやる……!」「それぐらいの価値は認めるわ。私の大鎌を蹴飛ばしたあんよを、すっかりお行儀良くさせて、かよわああいココが犯されて泣き叫ぶ様をまた見せてくれるのなもの？ つふふ、つれないお前はこんな娼婦の下着に手を出して人を悲しませるのねえ。もつと可愛らしいパンツを期待してたのに!」肌には憤懣を漲らせ、薄紅に染まった頬から湯気を立たせたランセリイの黒薔薇の暗がりの奥に、卑猥な意図の塊が忍んでくる。蟻の門渡りで下着の前後面を繋ぐ股布、小さな琵琶の撥のような形状の漆黒の生地 of 表面に、悪意に満ちた真珠色の手袋が、絡みつく運指を乗せてきた。曲げられて尺取虫じみた動きで、ついつい、と探り這われると、下腹部にジンと幻痛が生じ、破かれた処女膜の出血の乾きも生々しい淫靡な惨禍のことが脳裏に鮮明に蘇らされる。釣り針を刺す勢いでグンツ、と、火炎に巻かれても消えずに残っていた紫の口紅の痕を突かれると、慄きが最高潮に達した。妖しい悪寒に喉まで貫き通される。

「くああああううううううううつつ! はああああああええええつつ!!」

柱扱いされている長剣をしながら襟髪を逆立てて暴れる。腹筋を測定するかのようにな身を折り曲げて引っこ抜こうとし、魔力を全開にする。ギチギチと鳴った爪先の封じ釘が抜けそうになる。が——、想定内とばかりに更に追加の軍勢を周囲に打たれて取り囲まれると、背中 of 十字架はビクともしなくなつてしまった。

「ほうら、力づくじゃ駄目。もつと小細工で抵抗してご覧なさいな?」

その時、何故か目眩を覚えた。怒りのあまりかと思つたが違う。無痛だったので察知が遅れたが、左の内腿にヴェゾフイアンカの蛇頭の尾が噛みついていて。そして牙に通つた管から紅い体液と共に魔力を啜られているのが分かつた。

(血……貧血……っ?!)

少女の引き攣つた蒼眼と、自身の衣裳も藍液で汚して微笑む淑女の紅眼が見つめ合う。脂肪と筋繊維の内部を抉り摩られる危機感と興奮が肌を妖しい快感で痺れさせた。どん底に近かつた余力がたちまちすつからかんにされていく。最も簡易な魔術すら扱えぬ程——。「……負けない……負けない……っつ!」虚勢の幕が剥がされ非力さを曝かれていく少女。徒勞を繰り返し、ごっそりと奪われていく体力。血が足りなくなつた所為で思考の纏まらないランセはムキになり、細腕だけで縛めから逃れようと足掻いた。まるで肉食獣の顎に捕まつた獲物が、暴れ、振り回され、じわじわと反抗を削がれていく光景の、そのままに(考えろ……考えろ……何か手が……あるはず!)

「あららーあ! そんなに喜んで腰をはしやがされると何だか恥ずかしいわね!」

その言葉で正面の鏡の存在を思い出させられた。全身を余裕で映せる程大きい、アレだ。「う……っ」

スカートに掌を潜り込まされ、腰を上下左右に振っている自分が、中に。カッと頬が火照り、鳩尾に熱の塊が灯る。理性が抵抗の続行を命ずるより早く乙女心が金切り声を上げ、ランセリイは思わず、膝を支点とした屈伸回転運動を止めてしまった。

「あら、もう動かさないの？ やつと素直になれたようね！」

結局、どちらでも陵辱者が掌を叩き合わせる。ランセの柳眉が怒りと羞恥でひくつく。

「ね……え、ゾフィア。わたし、どうせなら相手の顔を正面に見て凌辱されたい……」

「やあよ、口の中で毒霧とか精製してるに決まってるもの。——次の小道具は、これ」一度ケーブマントの懐に引込んだ左手が、羽根ペンを一本、目の前にちらつかせてきた。青紫色の光沢と大きさからして、本人の子供時代の物を使った逸品だろう。根元をペン状に削っただけの簡素な代物だ。片刃のナイフ型の初列風切——鳥翼の先端部にあり常に風に立ち向かう力強く逞しい羽根——で出来ている。

「さあて、本題に入りますよう……黒頭巾ちゃん。一人でノコノコこんな森の奥にまで付いてくるなんて、どういうつもり？ 私の尻尾を見ながら、ふらふらふらり、物欲しげ。狼相手にわざと噛みついてきて、頬をはたかれたがって、ねじ伏せ廻られるのを心待ち？」

「自分で引つ張つてきといて何さーっ。頬をはたかかれたのはそっちでしょ、嫌われて喜んでる変態ストーカーの癖に！ わたしの笑顔にも限りがあるんだよ、捨てちゃうよ！」

「うふ、だっってお前の嫌がる顔が魅力的なのなもの。造り笑顔よりも。それに駄目よ。決

めたわ、お前は本性が淫乱なの。これからこれで証拠を沢山見つけてあげる。あそこを散々に甚振って快樂漬けにしてあげるから、精々抵抗して頂戴ねえ？ 言いたくなるまで好きなだけしてあげる。恥ずかしい自分を沢山、聞かせて貰おうと思うわ」

それが、破廉恥にも背後から臀部を掠めて内腿の間に差し入れられてきた。背面のフリルを退け侵入してきた柔らかくも芯のある感触が、ミニスカート前面の深い峡谷から、ひよっこりと顔を覗かせ、未だ戦闘の緊張の覚めやらぬ硬く張ったショーツに触れてくる。

「まさか……こんな羽根でわたしを陥とすつもり？ て、不潔そうだから当てないでっ」

「迂闊に物事を馬鹿にする物ではないわ。これでも由緒正しい魔界の拷問法で——」

「お医者さんごっこ次は尋問ごっこがしたいお年頃かなあ、ゾフィ！ いいよ、秘密の告白を幾らでも聞かせてあげる。だから聞き逃さないよう耳の穴を杭で抉っておいて?!」

馬鹿にされていると感じて少女は憤った。ちやちな道具で簡単に腰を強請らせる雌犬扱いされたと思ったのだ。対する責め手は罵倒を気にせず、湯船に家鴨の玩具を浮かべて水面下から突いて遊ぶ気軽さで、自称にしか見えない拷問器を陰阜に添い寝させてくる。

「つふふ、これ一本で女の軀が、どれだけの歓喜を強制されるのか、たっぷりと教えてあげる……っ！ 気をつけて？ 下手な拷問吏より私は徹底的よ!!」

——シユツ。

幽かな隆起の中央の縦筋を擦られてランセリイの眉が僅かに震えた。密集して列になった羽枝の一筋一筋が獲物に触れて欲望のままにざわめく。繊維の隙間を抜けた先端が、無毛の丘に直に触れてくるような突撃感。腰が数センチ浮き上がったが如き錯覚をさせられる。

「——つ……つあ……!？」

ショーツを衝き抜けてきた痒みに琵琶型の華奢な腰が戦いた。湿気った薪に火が灯ろうとする不気味な感覚。雪色の練り菓子に朱を一筋引かれて閉じた陰唇が、内粘膜を微痙攣させる。先程味わわれた屈辱の記憶も真新しい少女は心の堤防を高くした。

「思い出して？ あの時、確かにお前は悦んでいたの……。今度は逃がさない。牙も抵抗心も何もかも剥いで、すうぐに正直者にしてあげるわねえ？」

細胞の一片一片に至るまで刻まれた辛苦と不覚にも感じさせられた甘味の思い出。過去への反発心が半尖りの耳をピンと立たせ、殺意に比例した獰猛な笑顔を作らせる。

「うんうんっ、ゾフィアの優あしくて腐ああった蜂蜜みたいな愛撫は、今もわたしの心を茨で捕らえて離さないよっ。殺してバラバラにしたいくらい！ ってか、嘘だねっ、今だっってお前に身体を弄くられてると思うと、ジンマシンで死にそうなんだもん!!」

口ではまだ対等に立とうと泡を飛ばす少女の隠匿された上質の布に綻びを見つけようとも言うのか、羽根先が表面を何往復も縦に擦り始めた。斜めに傾き、一回で大量の面積を小人の軍隊の行進じみた、こそばゆい振動で覆ってくる。角度を片道ごとに毎回巧みに変え、慣れさせる隙を与えない。

「青臭い硬さで羽先をクニクニ押し返してくるココが、あの時は凶暴な本性も露わで怖ろしいったらなかったわ。吸盤みたいにぐいぐい、私の傘付き尾っぽを奈落へ招くみたいに引き込んで……お前はこの腕の中で顔をくしゃくしゃにして喘いでいたわね？」

虚実綯い交ぜの淫らな夜話を語って聞かせ、魔物喰らいが少女の心を騷りに掛かる。

「今だっって必死に戦う母親に隠れて暢気にこんなお遊び。いやらしくて悪い子ねーえ？」

「くっつう……わたし、馬鹿にされるの、大嫌い……今解放してくれたら、百倍返しで許させてあげるんだけど……!! 聞いている？ ふあ……、ひやめっ、くすぐっひや……っ」
スシュツリシュと擦過音。特に軸に対してV字を描いて並んだ毛先たちが、方向に逆らって擦ってくる時に刺激が強い。身を振る少女の局部がじんわりと熱を持つ。ぶっぶっ皮膚が粟立つ肉の反動が、じわじわと喉元に込み上げてきて、臍から鳩尾までの滑らかな肌がムズムズと震えた。控えめに再開された蕘踊りは芯の疼きを伴っている。

「また……内側から崩してあげる——コトコトコトコト、とろ火で煮込んで追い詰めて……? その小生意気なお顔が、もっともっと恥辱と悲痛で歪む所を見せて頂戴ねーえ!!」

「……自分の世界に入っちゃう人、嫌しい。くや……、それよりわたし自身を見てよーう。この無垢でつぶらな瞳をさー。催眠術に掛けて自殺させてあげちゃうからーっ!」

鼠が猫に甚振られるような気分だった。不吉な予感に耐えて白い喉が生唾を呑み込む。生地の上から探知機よろしく羽根ペンで摩られながら、秘部から滲み出す快感の鉞脈を探られる。ランセリイの場合、それは中央と上方にあるようだった。肉芽のフードを通過されると、キンツ、とした金属質の痺れが走る。網膜を屈辱の最たる記憶が灼く。

(あんな無様は晒せないんだよ……もう二度と……っ)

一瞬だけきつく閉じられる瞳。開いた時には決意の燐光が灯っている。

「わたしたちを傷物にした責任を取るの……あ……大変だよ、同情しちゃうっ！ 毎晩二人で鬨り抜いて……っみん、お、お父さんも混ぜた4Pで泣き叫ばせてやるんだから!! どう、こつちの水は甘いよ。少しは負けてもいいかなって気分になれたかなかな？」

「その気概と大口がいつまで続くのか確かめてあげる。もつとも、あっさり辱めに馴染んできているみたいだけどねーえ。下着の温もりと羽根の冷たい刺激が混じって気持ちが良いのかしら？ 姉とはぐれたグレーテルは魔女の抱擁の虜になって帰って来ないのねえ」

そう、痒悶が痺れに変貌していく。たかだか薄い布に守られているという偽りの安心感が、一筋一筋が針の如く感じられるブラシの生む感触を侮りで漉し、見目良い物だけを秘裂に塗しておく。するとまるで春に冬眠から覚めた蟲のように官能が這い出してくるのだ。

「酷いわね、酷い。醜いわ。なんて無様な牝餓鬼かしら。汚い膨らみをもそもぞ掌に押しつけられて指が腐りそう。あの生臭くて白いヘド口を股座からダラダラ垂れ流して、今度は私の世界を穢すつもり？」

「……く……っ！ はっ、ん、そうだったら、お前の舌で掃除するがいいさ。きつと寿命が延びる蜂蜜味の薬になるね、頬が落ちちやうよ……っ！ 自分がどれだけ勿体ない天女の御露に触れたか、あの世で思い知るがいいさ！」

戯けた口調を一転、残酷さを剥き出しにする董の凶女と、茶目っ気を一転、獰猛な殺意を見せつける激情の魔少女。まるで反発する磁石の同極のような二人。

「……いいいつに……っ、こうのおお……っ！」

羞恥の電流が脊梁を駆け上る。さりとて動かずにいることも出来ない少女は、腰を前後に振るくらいしか自由が無く、お手玉の如く弄ばれてしまうのだ。生じた興奮を否定しようとして躍起になってダンスする、股座から鼠蹊部までの過敏地帯を、フェザータッチの悪魔が徹底的に撫で擦ってくる。丁寧かつ乱雑な愛撫が快樂のメレンゲを立ててくる。

「ふ……っ……ふううううう……あ……」

(手が無い……っ?!)

その事実ランセリイは愕然とした。多少動けるように見えて、塵一つ分も相手の行動に干渉できない。暗くて狭い箱に閉じ込められたかのような閉塞感。

(こ、このぐらい……このぐらい何とかしてみせる……!)

先細りの未来から逃れようと、足の指を動かして釘を抜こうとし、結ばれた尻尾を何と

か自力で解こうと無駄な抵抗を続ける。俄に焦りだした少女の頬の隣に、気がつくどヴェゾフィアンカの顔があった。

「威勢のいいのは、もう終わり？ こうされると嬉しくて相手に逆らえない？」

綺麗な銀髪に滴る、拗くれた悪趣味。自由な右腕で白手袋の熊手を作り、銀袂の玄裳のフラットな胸を搔いてきた。奥に潜んだ敵意に癒った青林檎を鷲掴み、強く爪を立ててくる。「痛〜〜〜っ！ そ、んなこと、ない……っっ！」

更に、顔を顰めた少女の左の横腹の裂け目、ミーティに鋼線を巻き付けられた際に出て来た鋭利な傷口が舐められた。紅い絨毯の如き柔肉が潜り、肉の断層を掘りつつ湿らせる。

「ぎうつ、み！ ぐ……っう?! ……ふうううう、あがああ……っ……っっ！」

ウエハースを砕くように胸の指が食い込んできて、ミシミシと肋骨が軋む。少女の左右の蕾に順番に位置を変えながら何度も何度も、痣の刻印が残るほど強烈に。ゾフィアの右肩に腰を担がれるようにして、ランセリイは仰け反った。端正な顔が苦悶に歪み、長めの前髪を被った切れ長の瞳に烈火が滾る。凶女の全てを背徳に招く忌まわしい笑み。

「分かるわよお、軽口の裏に潜む怯えの音色。もう私の指の味を忘れてしまったと言うのかしら？ その脆い肉体を歓喜でズタズタに引き裂かれた夢境の一時を！ 耐えるのが辛くなったら何時でも軀の力を抜いて。そうしたら一思いにしゃぶり尽くしてあげるから」

「じよ、冗談じゃない……わたしは生まれ変わったんだ。悪夢だよ、あんなの……っ」

全身の切り傷が今になってズギズギと疼き出し、膿むような熱を孕んで苛んでくる。無理な姿勢で長時間酷使されていると、細かい脚が、眩い白磁の肌に汗を滴らせてガクガクと痙攣した。苦悶に満ちた肢体の中で、むず痒く暖かい感触になぞられる腿の付け根——ショーツの縦谷だけが、異質で恍惚とした痺れに支配されかけている。傷舐めで鋭敏に攪乱された神経が、陰阜からのパルスを何倍にも増幅してしまい、その悦楽の波にお腹の底を浚われた少女は臍の裏側を、きゅっ、と縮こまらせるのだった。激痛の鞭に唆された正直な身体が、唯一優しくされる一カ所に救いを求めて、甘い飴を飲み込もうとしてしまう。

「——騙……、されっ、るかああ……っ」

脇をきつく締めて抵抗する少女は、太腿を限界まで立てて、ゾフィアの擽り刑に耐えていた。そうすると注意が股間に集中してしまい、ますます羽根触りを意識してしまうのだが。元々、激戦直後である。たちまちランセリイの息は上がってしまった。

「ハ……ハア……があ、ぐ……ひゃ、あん？ ぎっ！ い……あふ……ん……はあ……はあああ……っ……ひくやいううううっっ！」

虐げられる少女の疲弊し切った身体が癒しを求めて、少しずつ薄い花卉を従順にしてみよう。下着の背面を唾え込んだブリツとしたお尻が、羞恥で淡く紅潮していく。

（駄目え……嫌だ……！）

己を律しようと悪戦苦闘する彼女の、砂上に楼閣を築くが如き努力を嘲笑い、銀髪の淑

嘲笑したゾフィアが何か口ずさむと風が吹く。それは少女の腰の右端を通り抜け、生じさせた真空で、秘座をガードする布切れの黒薔薇レースの脆いサイドを、スパリと両断。続いて羽根ペンを放された少女は淫猥な責め苦から束の間解放されて、カクンと顎を引いて項垂れた。気を張っていた膝が脱力して横に滑り、若腿を開いた股間が大きく喘ぐ。「強がっていても裏側ではこの通り。自分を支配し蹂躪してくれる相手を求めているのだと納得できた？ 答えなさい、リトル・プッシー・プリンセス」

「はあ……つう……はああ……あ……つ、ぜ……ん、ぜえ……んっ」

無事なサイドを太腿に引っ掛けて、下向きに風を受けた帆のように膨らみ、片側だけ垂れ下がってしまうショーツの股布。奥から、つるりとした未成熟なヴァギナが顔を出す。産毛すら生え揃わない白色の丘は、ホワイトミルクにほんのり混じった莓色の陰唇から、汗と共に一筋の粘液を延ばしていた。そう、はらりと落ちかける下着と股座とを繋ぐ線がある。愛液——。細い糸となって伸びたそれは生き物のように蠢いて、覆っていた黒布が外れてずれたのに合わせてゆつくりと、墮落しようとしていた。斜めに傾いた直線の半ば、下端の辺りに珠を作り、それを床の方向に沈めて、はしたない釣り針型の曲線へ変わろうとしているのだ。

「や——!!」

ランセが身を揺すつても張力を維持して鉛直下に向かう透明な柱。そこを遡る様にして、羽毛が秘園に近づいてきた。鮫の牙に狙われた小魚の危機感が身を包み込む。

「ごめんなさい。それとも、先刻たつぷり犯してあげた時の物だったかしら？ 可愛く喘いで随分と一杯流していたもの、まだ中に溜まっていても、おかしくないわよねーえ？」

耳元で低いトーンで囁かれると、子宮口の辺りが指で捏ねられるように疼いた。

——プニユ……シユチュ……ツ。

暴行のことなど必死に忘れて鎮座しようとする風情の未熟な女性器全体を、順向きの羽根ペンの尾が透明な糸を巻き取りながら、触れるか触れないかの微妙な軽さでゆつくりと摩り上げて行く。考古学者が化石に付着した土を羽箒で払うが如き、丹念さと愛を込めて。その異常な熱意と執着を以って初めて、この部位は真に官能器官として開花して行くのだ。

「……くあ……あ……ふ……う……あ……ああ……つ！」

無毛の丘をチェロの弓のように横断されて、演奏される少女の可愛らしい口をついて鳴き声が零れた。埃を散らすように理性を危うくされ、腰を甘い媚薬に舐まれていく。

——スヤツチュ、クシヨリ……。キチイ——ツプツ！

すべらかな丸い肉盛りを自在に滑る、青紫色も艶やかな羽根のナイフが、硬く閉ざされた秘め口の僅かな綻びをこじ開けようと、鋭い切っ先の数ミリを刺し沈ませてきた。既に一度崩落を経験している天の岩戸は気を引き締めて貝の如く縦筋の門を閉ざし直す。蟠り続ける桃色の微震に緩まされて、細い糸蚯蚓を啜え込んだかのような隙を消し去れない。

「あらあら淫売の亀裂は若い身空で緩くて大変。将来が心配だわー？」

「この邪念女あ……っ　いつか腹の中に消毒薬をぶち込んでやるう、ウウ……！」

真っ直ぐな薄刃が、パッキンのゴム縁の如くびっちり合わさろうとする締め付けに頭を挿して、くにやりと曲がった。かと思うと、ラビアのピザを掬うサーバーのようにスルリと窮屈な裏側に潜り込んでしまう。恍惚を孕んだ陰阜は極めて敏感に反応した。肉ビラの内膜が簾を叩いたように波打って熱い呼吸を繰り返し、秘肉の弾ける快感が爆発したのだ。

「つうくつう！」

内股になろうとした少女だったが、拘束に手綱を引かれて阻まれてしまう。

「ひゅ……っ……うう……っく……ううアオンツ！」

息を止めた唇よろしく硬直した秘裂の筋に侵入してくる羽根先は、中央の軸から斜め上に硬いピアノ線のような董色の毛を、迷いの無い直線で伸ばして織物の如く密集させ、構造全体で快樂の凶器を形作っている。粘膜に直に触れてきた感覚は肅然と整列したハーブの弦のようで、全長から見れば冰山の一角に過ぎない尖兵だというのに、くの字に折れ曲がった羽板の篋先が踊る度に、未熟な牝肉に痛美な賛歌を掻き鳴らされてしまうのだった。

「にゅうっ……あ……っ……！　くよみ……っん……ふ……うう……ああああ！」

溝の至る所にミニチュアのスコップを突き立てられ掘り返され、電撃に耕される肉畑。

乙女の花園が火照りを増し、貪欲な本能の疼きに耐えかねて、恥辱の蓋をずらしていく。内側に籠もっていた青酸っぱい淫臭を、潜めていた吐息を漏らす如く外気に混入させていった。妖鳥の翼に魅入られた陰唇が、夜明けに咲く朝顔のように花開かされていく。

「ふあ……ふひゅあああ……っ！　ひやき、そ……お……オ……ッ！」

鼻梁の麓に血流を集め、苦しげに眦を下げるランセリイ。腰から下がブルツと震え、額に汗の珠が浮かぶ。含み笑うゾフィアの思惑通りに。

——チュンツ！！

「っひゅ！！」

先端で縦筋の上端、尿道口や瘻りの有る部位を弾かれた。剛毛の拷問具が今度はエッジを、それと分かるほど綻んだ幼いクレバスに沿わせてくる。

シャープで攻撃的な輪郭を作る羽根の縁は、私の強い毛先たちが競って芯を伸ばしている所為で不揃いで、その段差は狂人の書いた支離滅裂な楽譜の音符並びもかくや。

「……触れ……る、な……あ!!」

パツクリと割れた姫貝、ささやかな地割れを起こした無毛の丘の頂上。滲み出した半透明の愛液の釉薬に塗れて朱鷺色に輝く可憐な肉器の谷底を、絨毛製の櫛の歯がたおやかに梳いてくる。或いは向きを変えて、櫛の本来の用途とは九十度違う、縦方向に。

「ひあっ！　あ……あア……アアアツツ！」

鼻に掛かった嬌声を尻目にゆっくりと、卑濡れして存在感を増した鋸が引かれ始めた。

に開いた陰唇の蝶の羽が哀れにひくつく。幼さに似合わずネットリと情欲の籠もった肉洞が性の芳香を立ち昇らせる。……ドロリ、と割れ目から半濁の液が滲み出した。傷のついた洋梨から、果汁が滲むかのように。内腿に幾筋にも枝分かれた河を描いていく。

「はああ……ツ、……つ、あ……く……、ハああ……つっ！」

完全に過保護な取り巻きを脱して台座に収まったミニカラットのルビーは凌辱の涙で淫ら腫れ、気忙しく開閉を繰り返す少女の口腔では白く艶めかしい八重歯が唾液の糸を引く。「うふふ、お前はただの息継ぎでそんなに熱い吐息を吐き出すの？ 敵に触られただけでこんなに発熱しているのは、何かの持病なのかしら？ 折角強くなったのに末路はこんな……本当に本当に残念ねーえ!!」

「うるさいうるさいうるさいいつつ!! わたしを惑わ……あ……アア……つっ！」

次第に粘りを増していく少女の液体を啜り上げる羽根ペンが、重さに負けて垂れ曲がる前に、と、垂直に閉じ谷に当てられた。「ちなみに、不潔そうでも悪かったわねえ？ これでも定期的にお手入れをしている宝物なのよー」とは、やや恨みがましい持ち主の弁。

「これをヴァギナに突き挿されて——魔界の女が、どれだけ魂を飛ばしたことかしら!!」

妖しく危険な予感に「ひにっ？」と腰を震わせたランセに向けて、ゾフィアが掌を上げて行く。葦色の濡れ羽が滲み汁を滴らせながら、薄赤の谷に矛先を沈ませていった。

——ツプブツツ!!

「くあつ、ああああんあああああ——ツツツ?!」

フォークリフトで運ばれた先端が、悦楽にぬかるんだ秘め口の、露わになった小振りの岩窟に突き立つ。その一気に槍で秘部から首の根元まで突き貫かれたかのような悍ましくも甘い衝撃をランセリイは生涯忘れない。櫛歯にして鋸の役目を果たす魔具が嫌がる秘肉をねじ伏せて、熱したナイフがバター塊に斬り込むが如く朱鷺色の肉に沈み込んでくる。

「あ……あああ……あああああああ……あああ……あああ……つ……つ……つ!!」

腰が翔ぶような狂悶が炸裂した。それ自身が意志を持っているかのように絡みついてくる毛先の探手。粘膜同士をきつく締めた未熟な女洞を強引に割り開き、痛痒な漣を響き渡らせながら乙女の柔膜を毛繕ってくる。ショートスカートを地震に遭遇したカーテンのように振動させて、迸った歓喜に串刺しにされた膝立ちの少女は戦慄きに顔を委ねたことだ。

——ズ……ツイイ……ズプ——ゴプツジュグププ……ツツツ!!

「く、あ……ハア……——……ツツ……ン、……ク、あ……アア……ツツ」

息の詰まった嬌声が漏れる。内側から剃刀で肉を削られるような恐怖と、陰壁と羽毛の魔悦的な摩擦発電による快樂の高圧電流。粘ついた愛液を吸って重量感を増す牝哭かせに、ぬらついた臍粘膜を極上の羽触りで愛撫されて、背筋が、すうつ、と高みに昇らされていく。

「……キイイ……つい!! ふきゅうううううう……つっ！」

たとえ子供時代の物でも、ランセの臍に対しては充分に大きい。しかし濡れそぼった花

の筒は挑発的で、最初からそれを啜る為に造形されていたかのように大胆に形を変えて、やがて奥まで呑み込んでしまった。それでもまだ根元をはみ出させていた羽根ペンは狭隘な膺肉の圧力に形を乱されてソードブレイカーの背の如き櫛歯になりながらも、ゾフィアに軸をクルリクルリと回転されると、快樂の熱に爛れた肉の鞘を縦横に掻きまわってくる。

「さて、たかが羽根ペンが一本入っただけな訳だけど、如何かしら？」

肩で息をするランセリイは、先程凌虐を受けた緑蛇頭の尾の棍棒じみた暴圧さとは趣を異にした狡猾さを、潤んだ膺で盛んに毛を蠢かす、澄んだ夜空の群青を押し固めてプラチナの輝きを一筋一筋に纏わせた宝石細工のような拷問具から感じた。

（く、苦しい……）

くすつと微笑んだ淑女が、獲物の体内の震えの伝わる筆軸から指を離して放置してくる。「それ、落とさないようにねえ？」

その心配は無いだろう。恍惚に痺れた少女のあどけない膺肉は、頬張った鴉羽をしつかりと啜え込んでいる。落とそうと腰を振っても自然と丹田に力が入ってしまい、逆に、息をするにも苦勞するほど弱った腹筋で締め付けてしまう始末。

「ぐ……ぐ……ぐ……」

喉の奥に言葉を呑み込む少女。ヴァギナの蠢動に合わせてペン先が左右に振れた。毛先に擦られる膺の奥が、今すぐ両手で掻きまわりたいぐらいに痒い。それは陵辱者が手を下さずとも犠牲者の活力を奪って自動式で絶え間ない辱めと快樂を与えてくる、無間肉地獄を生み出す責め器具なのだった。意固地に膝を折ろうとしない少女の、嫌い撥ね除けようとするが故の臓器の抵抗は、全て逆手に取られ、反射してくる愉悦に打ちのめされてしまう。「く……く……く……う……う……う……！　ぐ……ぐ……ぐ……う……う……う……！　つつ……」

幾度も幾度も唾を飲み込む少女の首に、大粒の脂肪が垂れていく。ペン先を愛液が伝い、ぼとりぼとりと滴った。絹糸のようにしなやかで針金の如く芯のある羽毛が無数に群生した初列風切が、卑猥な美意識に基づく生け花の肉壺に変えられた幼い粘膜を蹂躪する。

唐突だが、羽ばたくなどしてばらけた鳥の羽毛が、なぜ元の密集状態に戻るのか、ご存じだろうか。毛の間に細かい鉤爪がびっしりと並んでいて、羽繕い等をする時、それら小羽枝がマジックテープのようにくっつき合うからである。今、それがランセリイの膺内で行われる際に、膺襞を巻き込んで掻きまわり、耐え難い引つ掻きの疼きを生じさせていた。

——チプッ、チプチプチプッ！！

（し……痺れる……痺れるよおお……つつ！）

海辺の貝殻の内側のような淡いシエルピンクの粘膜が猛禽の鉤に幾度も傷物にされ、腰の抜けそうな淫らな刺激が襲いかかってくる。湿潤に分泌される愛液。波打った膺壁を甘美な恍惚のシロップ漬けにされて、劣情に燃え上がった子宮がひっくり返ってしまいそうだ。

「くかあああ……!! くあああ、ふ……ふあ……く、ふううう……くあああ……!!」

本能の要求を懸命に堪えていた膾壁が、次第にキュウウツと収斂を始める。そうなるとうち止められない。必要以上に全身の筋肉が張り詰め、拒絶心のあまり自制を失った粘膜が力一杯絡みつき、造りの浅いヴァギナが咀嚼を始める。ペン先の痙攣が角度を増す。

——ズチウツズウツズ……。

侵犯者を憎んで押し潰そうと蠕動する膾壁は、結果的に先端を奥へ奥へと誘うことになり、羽毛を従えた小骨の如く硬い中央の軸に、子宮口を、ちよんと突かせてしまうのだ。

「………う………う………つ………フウウ………フウ………ウ、………ツツ!!」 嚙まれた臼歯が濡れた呼吸を潰す。押さえた激しい喘ぎ声が固く閉じた唇から漏れ出てしまう。

「抵抗は、もうお終い？ 甘えたーい？」

「く………誰がア………ツ！」

「なら、説得力のある格好を見せて貰いたいわねーえ？ 壊れたティーカップ・コースターみたいに情けなく腰を乱れさせて、お前の意地やシェリスに対する想いは、その程度？」

鼻笑いを交えて叱咤される悔しさが涙腺を緩める。ギプスの如く固く顎に巻き付いてくるゾフィアの手によって、見ないように努めていた正面の鏡に、ぐい、と顔を向けさせられた。そしてランセリイは軽い絶望を感じた。凌辱の熱に魔される夢遊病者がそこにいた。閉じようとする臉を扶け開けられれば、嫌でも自分の姿が飛び込んでくる。

(ツそおお………つ、わたし、やらしい………つ)

あどけない肉のコップに入れられた悦楽の泥を拷問のマドラーが掻き回す。黒薔薇の造形のスカートが卑猥な羽根ペンを挟み込んで左右に揺れる。鋼線に裁たれたドレスのスリットから浮き彫りにされる白い肌は、あえかに汗ばんで上気し、ほんのり紅く染まっていた。

「素晴らしい姿だわ。およそこの世の良識全てに反するように、とつても淫ら。そんなつれない真似をしてないで、刮目してご覧なさいな。凄く興奮するわよ？ 私だつて欠片ほどは残っている常識が邪魔をして、こおんなみつともない格好は出来やしないわ?!」

背後から擦り寄るベルフラワー色の肩背套に今にも胸から下を包まれそうな、黒炭色の胸の編み上げは、悶える内にだらしなく緩みかけている。元より幻惑の美を纏う肌着は言うに及ばず、重厚な厚手の布で作られていたはずのミニスカートまでもが媚毒の気に当てられて、水槽に捕らわれた海月の如く、矩形で区切られた逆様の世界をなよやかに漂っていた。

「鏡の前で 男を誘う だなんて正気の沙汰とも思えない。ファックを強請る意地汚い色狂いの淫売臭が薰って鼻が曲がりそう!!」

「え………へ………つ、わた、ア、し………い………の匂いでつ、ふき………ツ………ち、窒息………う………つ………させ、てつ、フあ、へて………あげ………たい、なあ!!」

ゾフィアの菖蒲色のブラウスの胸元に温もりを伝えて互いを撫で合うランセリイの背中

が、未だ筋の柔らかい羽をばたつかせる。細い腰が両側から万力で締め付けられるかのような羞恥に戦くと、鏡の中の卑猥な物体も辛そうに――故に蠱惑的に身震いをする。これではまるでヴュゾフィアンカに仕えて淫らな奉納の舞を踊っている巫女みたいではないか。(いやだ……こんなの……)

魂が悲鳴を上げている。開脚磔で煩悶し、股間に啞えた羽根ペンの先で空中に奇怪な文字を描き出す無様な格好を映した鏡は精神の墓標だ。立てるべき証も為せず無力に甚振られ、あろうことか喘ぎ声を漏らしている自分の姿。それは快感に勝る一番の責め苦だった。「この羽根ペンで悶えるということは……お前は育つ前の私にすら敵わないのよね？　こんなはまだ序の口。一本目から泣きそうな顔をしちゃって、先が思いやられるわ？」

「い……ぼん……め……？　く……っ……ひ……」

「そうよ、こんな面白い状況を一本で済ませる筈も無いわ。何本耐えられるかしらー？」
クスクスクス。ゾフィアの懐から取り出された二本目の羽根が、異物を啞えて艶めかしく蠢動する無毛の肉丘に触れた。少し柔らかで、先程とはやや感触が違う。

「ハイ、ヴュゾフィアンカのレイト・レイト・ショー！　DJはいつものサーキュラー・ビッチ、今夜のゲストは、ちよっぴり泣き虫で飛びつきり意地っ張りな女の子!!」

「な……いきなり何を言い出して……！　つかあああああああああ……」

突然明るい声で悪ふざけを始められて、場違いさに羞恥を覚えた。しかし罵倒しようとしたランセリイは瞬間、膺を引き絞られる快感に捕らわれて嬌声に変える羽目になる。

遅しくこしの強い毛先がラビアに突き刺され、柔らかな毬栗となって悦楽の針で刺してくる。一転、横に倒されたかと思うと、瞼にアイシヤドウをのせるブラシのように優しい毛触りで、強烈な刺激でひくついた厚みを増す陰唇を過激に甘くあやしてきたことだ。

「このお嬢ちゃんが強気の仮面を剥がされて泣き喚く姿を生放送でお送りします!!　さあ、早速インタビュ―！　羽毛のコックを美味しそうに啞えて、自分の指じやゼンゼン足りないのねえ？　食るような激しいマスターベーションは一日何回なのかしらーあ？」

「や……やあ……っ……違うもん……わたし……ッ……まだあ……っつ!!」

ゾフィアが鏡の向こうの自分をスタジオ外の見物人に見立てて話しているのだと気づいて、火に炙られるように全身が熱くなった。結合した小陰唇と大陰唇を離れさせようと、羽根ペンを間に差し込まれて擦りあげられる、秘奥の谷間を擦られる快感電撃に横腹がゾクゾクと恍惚で撫で上げられた。鴉の毛先で弾かれて蕩けた愛蜜が、ぴちやぴちやと内腿に飛び散っていく。

「くあ……あっふううっ！　も、やめろおとお……っ……離せええええっつ!!」

四肢を拘束された膝立ちの少女は、唯一自由なお腹をコルセットが外れそうな程、振り乱す。膺肉に喰いついてくる羽根が擦れますます酷いことになり、最初の責め具を頬張ったクレバスが口腔を動かして、生えたペン先で宙に絶叫と狂気に満ちたSOSを刻印する。

し分けられ、軽いスナップを効かせて振動を掛けられたチェーンソーに胃の腑が激しく颯り混ぜられ、響き蕩かされていく。緊迫した腿が残像を見せて笑った。痺れ切った鼠蹊部から感覚が失せ、陰阜と肉芽を晒した腰が時間の狂った乱調子の振り子となって左右に揺れる。

「あ、あつ、ア、アツ、あつ、あ——つつ!!」

二重爆撃に晒されて、たちまち少女の陰洞は土砂崩れを起こした。グンツと一思いに激しくヴァギナの濡れ矛を押し込まれると、お皿の底に猫じゃらしを突き込んだように先端が滑る。水泳のターンの如く背を丸めた羽根表面のざらついた感触に湿潤な最奥をペロリと舐め上げられて、革靴の中で曲げられた指が血が滲みそうなほど強く釘を掴んだ。

「つああああアアア——ツツ!! お腹アつ、暴れツ、わしゃわしゃが、増えエエエツ! 翔ぶううつつ、翔んじゃあああ——ツ——アアアアア——ツツ!! ら……めえ……つ、ひゅぎやああああああああああああつっつ!!!」

悍ましい歓喜に腰が破裂する。駆け昇る恍惚に脊梁が砕け、理性が煮崩れた。

——ジュピツツ!!

「イひ やあいレエエエエエ! ヤああツ、やあああああヨウウウツツ!!」

——ダンツダンツ! 昂ぶりと拒絶の板挟みになったCの身体文字がバスケットボールのバウンドの如く上下に跳ね回り、床に打ち付けられた膝が悲痛な足拍子を鳴らす。

「みイイイツぐ……きゅみつハアアツオオオオオオオ——ツツツ!!!」

——ゾジュクンツツ、ビクビクビクンツツツ!!!

ショートの撥ね毛が緊張のあまり、ぶれる程に振動し、乱れた前髪が汗を散らした。受胎器官で小爆発が起こり、少女の意識を刹那、彼岸の波打ち際に打ち上げさせる。

(なにか掴まるものおおつつ、白いつ、全部白いいいいいつつ!!!)

子宮頸管が俄に灼熱の回廊と化す。ヌガーを熱して形を失わせたようなベットリとした白濁蜜が流れ出す感覚。孔を撫る二枚羽の先端に卑呪の祝福酒となつて振りかかる。

「……………ふあああああ……………ツ……………つハアアアアアアア……………ツツ……………!!! っ
キやいい——ツ——いいいいいいいいいいいい——ツツツ!!!」

長々と一声叫んで、がくり、と茎を手折られた花の如くランセリイの頭が垂れた。ゼエツゼエツと舌を突き出して喘ぐ。頭に重い物が詰まった様で、とても苦しい。

——ジュクリ……。脳味噌を握り潰してくる燃え滾った圧迫感に誘われて、まるで地下水が染み出すかのように、肉土から濁ったジュースが滾々と分泌されるのだった。

(イっちゃつ、た……? ……わたしの中で……本気の汁が一杯流れてるううう……つ) ぎりぎり拳が握られる。とぼ口から漏れた粘液が大粒の雹となって鏡面に広がり、脚の付け根やニーソの飾り縁にまで垂れてきた。誇り高き幼身が生々しい官能に穢される。

「つふふ、もう立てない?」

「そんなことお、ない……い……！　ひ……ん……つつ」

二本の羽根箒が膾内で触れ合い、下半身が崩れるような痛烈な痺れが膨れ上がる。擦れ合った毛先の振動が何倍にもなって伝わって、ダイレクトに頭に反響する。異物に慄いた膾が勝手に蠢き、ますます過敏な粘膜が羽根と擦れ合ってしまう。

「ふうううう……ふううううう……！」

快感の連鎖爆発を飲み込もうと少女は身悶えた。甘く荒々しい歓喜の渦の中で今にも溶け落ちてしまいそうな細い腰を前に迫り出す。背後の剣に、己の悪魔尻尾で柄に縛られた腕ごと体重を預けてすがりつくことで、辛うじてランセリイは姿勢を維持している。媚薬性の羽根タンポンが独りでにざわめき、性感が目を覚ましたばかりの幼いヴァギナを天井に舞い上がるような心地でねぶって、すっかり目元に朱を掃いた少女の理性を従順に轢してくる。乳首を痠り勃たせて尖った胸先を堅琴を奏でるように爪弾かれた。

「ふううう——はア……っ……こ……んなの……っ、ア……何でもオオオ……つつ!!」

薄い胸が忙しく上下する。チョキを作ったペン先が嘲るような開閉を繰り返した。

「ふふ、辛うじて溺れていない、といった所ねえ？　だけど、そんなに必死な顔で我慢しないとならないなんて、自分で根は淫乱だと白状しているのも同然じゃない？」

「くぎゅうううううう……つつ！」

涙で前が見えなくなる。嫌々をするように否定で左右に首を振る。

(……い、今はまだ思考、保ててる……けどっ、これ以上……、こんなのいつまで……)

ひたひたと忍び寄る破滅をただ待っただけの無力感に打ち拉がれ、アクメの氷山の一角を体験した蒼瞳が澱んだ。険のある目尻が熱に浮かされる。俯いた表情から抵抗の牙が剥がれ落ち、弱い素顔が覗いてしまう。閉じるのを忘れた口が罵られるような呼吸を繰り返す。

「ハアッ、ハアアッ!!」

「私の大好きな、とてもいい顔よ、拮抗していた戦う決意と快楽への誘惑が、どんどん奈落の方向へと傾いていく。背徳の宴へようこそ？　一度でもそんなエッチな目をした奴は、もう虜。身も心も虜り墮として、浮かんで来られない深淵の底に沈めてあげる」

ボタボタと愛液を垂らし、潤んだ瞳を己の汚した床に落とす少女の耳元で、女が囁いた。

「ここは終幕のないネバーランド。皆であんな風に遊び続けましょう？」

凶女の指に涙を拭われ、顔を正面の鏡に向けさせられた。また無力に囚われる姿を見せつけられるのかと覚悟を決める。が——。更に予想だにしない光景が目飛び込んできた。

「……な、なにこれ……っ、わたし、こんなことしてない……！」

長剣の草蔓の柄に縛められた手首が憤激のあまり強張る。眼前の別世界ではランセは拘束されておらず、同じ姿勢で背後の女の首に両腕を回してしがみつき、意固地に凌辱を拒絶する本物とは正反対に、甘えながら積極的に腰を振って羽根ペンの味を貪っていたのだ。

——アン、気持ちいい……ッッ！　ワタシ、これ大好きキイイッッ!!

ゴ丁寧に音声付き。下着を脱いで剥き出しの未熟なラビア。熱く潤んでぬかるんだクレバスに羽根ペンが突き立っていて、グボグボと愛液を泡立て卑猥な抽送活動をしている。淫蕩な微笑みを浮かべるそいつが、快感に抗おうとするオリジナルへ見下した視線を投げかけてくる。空中で前後に8の字を描くように腰を振り、悦楽に酩酊して大きく開けた口腔を己の舌でねぶり廻しながら、尖った八重歯を上下させて無言でせせら笑ってくる。相手を油断させる策略を持って犯されているのではない。如何なる棘も腹に収めず、真に屈服し墮落し、進んで淫らに身を委ねている己の姿。強者に媚びを振りまき保身の為に魂の尊厳を売る姿に、ランセリイは言い知れぬ嫌悪を覚えた。

「鏡に映っているのだから、お前の本性ね！」

「……………ふざけないですよ……………っっ!!」

その言葉は看過できない。胸のボイラーに火を噴かせた少女は顔を背けることなく挑み掛かり、寧ろゾフィアに対する以上の憎しみを以て、砕けるとばかりに鏡を睨みつけた。

（許せない……………わたしの姿を真似しておいて、なんて弱くて卑屈でやらしい姿——！）

ある意味金縛りに会って目が離せなくなってしまう、じつとりと掌が汗ばむ。己の姿を模した悪意の繰り広げる艶舞は、とてつもない破壊力を備えて、魔少女の心に羞恥と屈辱の根を下ろしてきたことだ。

「食い入るように見ちやつて、興味津々ねえ？」

「羞恥責めのつもりなら失敗だね、ヴェゾフィアンカツツ。こんな偽物、幾ら見せられたって殺意しか湧かないよ!!」

「違うわ？ 寧ろ、お前ぐらいの激しい敵意を持っていてくれないと楽しくないの」

茶化したゾフィアが肩を竦めて羽根ペンの三本目を取り出すと、背後の凌辱者の脅威を忘れていた虜囚の股座を、乗馬の鞭の如く痛烈に引っぱたいてきた。

——ピシッ、パシッ、ビシッ！

「ひゅ……………うっ、っキイイイイイイイイッツ！」

乾いた羽根箒の残酷な不意打ちで紅い真珠を哭かされ、喉を見せて仰け反らされる少女。「あつは、顔を上げたって駄目！ どこまでもお前の恥態を見せてあげるわ！」

気がつくのと、いつの間にか周囲一面が隙間なく鏡に覆われ、小さな半球状のミラー・ドームに閉じ込められてしまっていた。半径一メートル程度、少し身を乗り出して腕を伸ばせば軽々と指の届く距離に、無数の自分が様々なポーズで映っている。

男に組み敷かれ背後から犯されているランセリイ、複数の女性と入れ替わり立ち替わり肌を重ねているランセリイ、どの鏡像も蕩けた笑顔浮かべて行為に没頭していた。

「うにいつ?!」

憤りすら押し潰す摩獄のプラネタリウムの圧倒的な物量の前に、鏡の外まで噎せ返る淫臭に包まれているかのような錯覚すら感じてしまう。たじろぐ暇もなく——、

「さーあ、お勉強のお時間よー？ 今こそ、私の大鎌を見切った眼と旺盛な学習意欲を存分に発揮する時だわ……っ」

（っ?! しまった、呪術っ？ あ、頭と目が動かせない……?!）見開かれた宝石の虹彩の周辺が強張った。金縛りが喉の飾りから上、特に眼球に集中し、鏡の中の淫宴から目を逸らせなくなっていた。力の限りを尽くして首を振っても、オートフォーカスのカメラのように何処かにピントが合ってしまい、否応なく別の情事の風景が飛び込んでくるのだ。

「う……ア……ッ、ドオ……っ、どうい、う、意味……、何をする気っ！」

「うふ、お前の頭の中を、私好み^{この}に造り変えてあげるのよお……っ」

「な……ッ、に、考えてっ、クレイジーッ！ タンマッ、ちよつとタン……ッ！」

恐ろしい返答に心胆寒くした少女の顔が天頂に向けて固定されると、プラネタリウムの星座の如く、様々な体位、プレイの幻像が網膜を左から右へと流れ始めた。無数の自分の犯される姿が視覚を通じて脳髓に流入してくる。まるで壊れたロボットのようにガクガクときこちなく頭部を動かす彼女と対照的に、艶やかな仕草で淑女がころころと笑う。

「羨ましい場面が一杯有って目移りしちゃう？ 大丈夫よ、全部、教えてあげるから！」

（嫌だッ、こんなものになりたくないッッ！）

いきなり、自分が四つん這いで大男に組み伏せられ頬を張られている光景を見せつけられたランセリイは、何よりもその幸せそうな——ランセ本人には腐り落ちた肉塊のふしだらな模様としか映らなかったが——笑顔に反感を覚えた。ミラーハウスのポルノビデオの主役は裸身である。淫らに輝きくねり、まるで白餅を捏ねられるように小柄な尻にペニスを突き下ろされて、恥知らずなよがり声を上げている。

（あれは自分が相手より弱いことを確信している顔だ……！ 庇護下にあることに安心して、支配されることを喜んでいる——っ!!）

力の序列に関して潔癖性とも言える精神の持ち主に取って、それは忌むべき敵だ。うねる柔肉から剣を突き立てる隙を探し出し、憎しみで肩を激しく上下させながら、頭の中で何度も何度も八つ裂きにしていく。

「糞……全部殺してやる!! しない……わたしはあんなこと絶対しない……っ!!」

「嫌いなよねーえ、ああいうの。手が届いていたら間違はなく首を絞めるぐらい。気になつて気になつて夜も眠れず絶えず監視しないと不安で頭が一杯、学校で隣の席の思い人に恋い焦がれる乙女みたいに、気がつくと見ていくくらい!!」

獲物の畏へのかかり具合に凌辱者がほくそ笑む。まるで魔少女の怒りを煽り生贄を捧げるかのようにスライドショーが始まった。媚びて完全屈服し命乞う情弱ども——。

（死————ネッツ!!）

やることは彼女の戦いの基本姿勢と同じだ。場の全体像を瞬時に見取り、蒼い宝石のような瞳で詳細をつぶさに把握し、相手の無防備な所を全て攻撃的な観察眼で曝いて敵意の

刃を刺していく。騎乗位で汗に塗れている奴の、跨った男に揺さぶられながら、まだ蕾のような二つの隆起を無警戒に露出させている胸。松葉崩しで高々と上げさせられた脚の付け根。年増女たちに囲まれて魔女のサバトの如き肉輪の中心に肢体を饗する奴の、黄金色の蜂蜜でコーティングされた小さな羽根の根元。どいつもこいつも自分たちこそオリジナルだと言わんばかりに挑発的にこちらを見下ろして腰を振り、媚態を振りまいていた。

(あんなこと……あんなこと！)

どんな鬼姑でも、今の少女ほど憎悪に滾ってはいないだろう。どす黒い憤怒を燃料にして爆走し続けるモーターサイクル。止まり方を知らぬまま輪を回すハムスター。

「お前の気性は助かるわ、ハリネズミさん。あんまり泣き喚いて上を見ないようだったら、眼球を抉り出して瞼とも涙腺とも切り離して双眼鏡に括り付けなきゃならない所だもの」「だまれだまれだまれ!! 誰の頭を造り変えるって? 相手を見て物を言うの良いよ!」カツとなったランセリイは強引に呪縛を振り切り、眼前の鏡に白焔を叩きつけた。

——パライイイイッン!! と耳障りな音を立てて、それが砕け散った瞬間、

「はあい、条件クリア! 召喚、歪鏡の邪精霊群!!」

周囲に舞った破片から、か細く滑らかな無数の腕が、魔性の暴君に向かって伸びた。二の腕や太腿を掴まれる。拳大だった欠片が全て大きな長方形の鏡に変わり、水面の如く内側から盛り上がる。そこを突き破って生えてくるのは、半透明な少女たちの上半身だった。

——クスクスツ。いるヨ、いるヨ、生意気な子供がいるヨ!

——ちやおっカ、ちやおっカツ、虐めちやおっカ!!

「は、はなせ、このつつ!」

この空間で起きていた不快な現象の正体である。鏡の中に棲まう邪悪な精霊たちだ。硝子の如く透き通った青い肌。硬質なのに柔らかい不思議な髪。アクリル樹脂を埋め込んだような、はしっこい瞳は、紫の光を帯びている。

彼女らの身体は、魔少女に触れた掌から暖かみのある肌色に変じたかと思うと、たちまち変身して、藻掻く獲物の姿を取ってみせた。ライアーズ・シェイプチェンジ。悪意と嘲笑の為だけにオリジナルを模倣して存在しようとする、歪んだ鏡の使徒たちの能力である。扉を抜けて次々と実体化しては、タツチと共に姿を変えて淫蕩な笑みを浮かべる、本人の顔。身動きできないランセは溢れ出す鏡精少女たちに群がられて、たちまち押し潰されてしまった。

「本物の物覚えが悪そうだから手伝ってくれるんですってー」

「く……っ……、や……あ……っ……!!」

——おとなしくしなヨ、たつぷり可愛がってあげるヨウ♪

——ワタシ、いき目覚めたての開きっぱなしオマ○コから愛液吸い出すのやるウウ!

裸身を晒した者、衣裳が半脱ぎの者。姿こそまちまちであったが、一様に興奮に肌を染

め、媚びた上目遣いをこの空間の支配者であるゾフィアに、蔑みの視線を淫辱の褥に横たえられたランセリイに向けてきている。無数の自分がクスクスと笑い合う。彼女たちが見せ付けるようにその平らな胸で遊び、互いに絡み合い、そして近づいてくる。散々己らの物真似を糾弾した者が見せている恥態への、頹廢的で陰湿な欲びが風の如く吹いてきた。

——わたし、こいつらの前で達させられたんだっ、無様な屑共と同じみたいに——ッ！

何よりも、目の当たりにしている奇怪な現象が、自分自身が卑猥な姿に墮すという悪夢が、ついに現実の物になりつつあることの象徴の気がして、心に雷鳴の如く恐怖が轟いた。

「く、来るな——っ！ お前ら、なんかに、教わること、ないっ！」

羽を緊張と警戒でピンと立てて、少女は自由にならない四肢に力を込める。まずはその強張った肉体を解そうとでもいうのか、婢女の群れが一斉に黒翼に手を伸ばした。墮落の伝道者たる少女たちのふくよかな掌の触れた箇所が、じんわり、と熱くなっていく。

——キャハッ♪ ホントかなあ？ 身体は興味津々の癖に強がるもんじやないヨウ！

模倣した身体の具合を確かめるように一斉にあちこちを八重歯で噛みつかれた。スカートに黒髪を潜らせた一体の八重歯が、丁度、肉芽の真上に刺さり、感電したかのようにランセリイの肢体が硬直する。微痙攣を見せる生白い四肢が獲物本人の舌でしゃぶられる。

——アン、この子のお肌って、すっごく美味し〜イ！

——敏感でゼリーみたいに震えちゃって可愛いヨウ！

「く……ふ……ふ……！ ふああああああああつっ！！」

身をくねらせて逃げる所を泥鰯の如く捕まえられて、群がる腕に銀衿の玄裳を剥がされる。胸元をブラごとずり下げて、先程、享樂の淑女の指につけられた丸い痣を露出させられると、将来膨らむ前の丘陵に繊細なタッチが労るように降り注ぎ、鈍痛を狂おしい疼きに昇華させてくる。

パフをずらされ露出した、針金のように細い肩に恍惚のキスを。耳やうなじに甘い吐息を吹きかけられながら乱れた髪を梳かれ、羽根筆の抽送を受けて小刻みに痙攣する唇を交代で奪われた。初アクメの残滓に苦悶する卑猥に熱く濡れそぼった呼気が貪られていく。

「んああああ……っ！」

——興味津々の、この身体をごらんよーウ？ 淫乱な牝猫ちゃん？ 期待してる癖ニ！

蒸れた股座が掴み上げられ、鏡中の自分が味わっているのと同様の歓喜が流入。肉芽をしゃぶられ、唾液を嚙られ、お尻の孔に舌を突き込んでねぶられる。胸の奥から荒々しく渦巻く原初の欲求が込み上げてきて、敵の思惑通りに食欲な渴望を植え付けられてしまう。

——ドクンッ！ 自分の体内で巨大な高鳴りの音を聞いたランセリイは、ボルトで固定されたかのように固まって動かない首を小刻みに震わせて、咆哮じみた抗いを口にした。

「認めないっ、みと、め……ふあ、あぐあ……っ！ みとめ、ない……いいっっ！」

網膜から屈辱を刷り込まれる少女を呪縛が取り込んでいく。鏡との距離が、ぐんっ、と

子のパンティをプレゼント！ よく見なさい、あれとお前、何処が違うの？」

全周囲から息遣いがする。視姦の側に回ったドーム内の精霊たちが鏡面に内側から貼り付き、侮蔑しながらこちらの様子を伺っていた。耳に押し寄せる漣の如きざわめきは細部を聞き取れず、あらゆる醜悪な想像を掻き立てる。どうせ口々に囁いているに決まっているのだ。違う所などあるものか、と。募る羞恥。口惜しさ。

(……泣く……もんか……)

かつては蜘蛛少女の心の澱を啜って甚振った黒銀の魔性は、今度は自身の中に溜まっていく負の感情に内面を喰い荒らされていった。ゾフィアの無慈悲な指先が、複雑に絡み合った羽根を摘んで軽く上下に揺する。と、気丈に振る舞う獲物は「ひっ！」と呻いて喉笛を痙攣させ、甘く重たい愉悦の波動に内側をグズグズに蕩かされていく。深く打たれた快樂の楔に心の抵抗を阻害され、媚肉を梳かれる少女の目元が恍惚混じりの涙に濡れた。

「よ、よくも、わたしの身体をこんなにしたなああああつつつ！」

奇怪な術に挟じ開けられている瞼の目頭の奥がジンと熱くなった。まるで人型をした蠟燭に火が灯ったかのように、淫らな熱に苛まれる未熟な肢体。強固に張り詰めた意志の乱れに一气呵成に攻め込んで、延々と続く姦獄の群像が意識に襲いかかってくる。

「く……くう、くくううう……つつ！」

眼球の水晶体を貫く刺激的な情景がプライドを軋ませ、視神経を通すだけで疲労が精神に蓄積される悪意の祭典に心がオーバーヒート。脳にかかる桜色の過負荷の具現化した煩悶感が肢体に絡みつき――、

「もう、お前は呪いに囚われたわ！ 媚びた顔の作り方を、腰の使い方を――その小さな身体をどう振る舞わせたら最大限の背徳を味わえるのかを憶えなさい。私専用の娼婦に生まれ変わるのよ！」

「い……や……だあああああつつ!!」

貸し切りの星映館で宇宙の淫靡の果てを教え込まれる、月の物も知らぬ稚児の女陰。三本羽が経血代わりに愛液を吸い、湿った綿に小石を混ぜたような抽送で粘膜を擦り上げていく。

(か、身体の、感覚が……自分の物じゃ、ないみたい……) 硬い擦過による堪えがたい疼きが、軀を妙に熱くふわふわと浮かばせる。心地よい電気が走る。負けてしまいたい。いつの間にか少女は、背筋を女の胸に預けて、鏡屋敷の天井を見上げながら機械的なリズムで肢体をくねらせ始めていた。密やかに耳元に唇を近づけてきた銀髪鴉翼の淑女の囁き声と、膈内の羽根の振動とが一体となって、まるで催眠術の如く、硬直した少女の荒れ狂う心の内面に揺さぶりをかけてくる。

「ほら、ああいう顔が私は好きよ？」

反抗の意志を湛えながらも遠くに視線を投げ出したまま戻せなくなってしまった蒼瞳が、

相手に誘導^{どう}されるがままに、内面の凄まじい拒絶を伺わせるぎこちない仕草で、指し示^{しめ}された方角を向いた。バックから怪物に激しく犯されているランセリイの顔を正面から見ている光景だった。両腕を家鴨の翼のように後ろに伸ばして手綱代わりに掴まれる鏡像が、噛みそうなほど舌を突き出し舐^なを下げて服従^{ちか}を誓い、更に過酷な責めをせがんでいる。汚らしい舌で首筋を舐められると、暖炉^{だんろ}脇の愛犬の如き安堵^どした蕩けるような笑顔を浮かべ、そして要領の悪いオリジナルに蔑んだ眼を送ってくる。墮^おちれば辛いことなど無いのに、と。

「わたしは……っ……大嫌い……だよっ！」

憎しみ、嫌悪、ありとあらゆる否定心理の深さを反映した身体能力が、敵と認識^{にん}している対象たちのふしだらな挙動を事細かに観察し、卑猥な姿を軽蔑と共に脳裏に刻みつけながら、コンマ何秒で如何なる方法で殺せるかの答えを導^{みちび}き出していく。

反発し攻撃衝動に満ちているが故の、その計算高い行為が完全に裏目に出ている。それでは自分で自分に刷り込みをしているようなものだ。脳に蓄積された敵の一挙手一投足の情報が、搔き立てられた肉欲と直結し、本人の手から離れて無意識に四肢を動かしてしまう。お菓子^{お菓子}の家に招かれ家具を見回した子供が、涎を垂らすのを止められないのと同じく。

「あ……ああ……うう……あ……」

嬌悶の大海にたゆたいながら、少女の肉体が、おずおずと口を開けて舌を突き出した。抵抗心で胸がささくれたと同時に、熱い吐息が犬のように吐き出される。砂糖^{とう}味の凌辱の罠に絡め取られた少女は、感じる忌まわしきとは裏腹に、観^みた物全てに反応して無自覚に真似して動く筋肉によって、淫らな舞をトレース——自然と身体で憶えさせられてしまっていた。何せモデルは自分なのだ。これほどすんなり頭に入ってくるレクチャーも他に無い。「ふふっ、武術も色事も、鍛錬^{たんれん}の基本は型の模倣^{かた}と反復練習による動作の常態化よ。全部頭に焼き付けなさい？ 憎いでしよう、忌まわしいでしょう、お前が嫌う姿そのままのもの。そんな物の真似をさせられる気分は如何？」

「う……あ……あ……あ……っつ！」

一種^{しゆ}のトランス状態であった。閉じることのない瞼に収まった蒼い宝石を、止まらぬ熱い涙が濡らして乾かさない。学習能力の高さを逆用された少女の小さな頭が、愛玩^{がん}動物として扱われる屈辱のホログラムで一杯にされていく。

されてもいない正上位の抽送を反芻^{すう}するように、腰が上下に揺れ、締まった膺^{うで}が羽根ペンを握り込む。口腔に突き立った仮想の触手が放出した粘液を飲み干^ほす為^{ため}に、咽頭^{いん}がこくこくと動いて空気を呑み込み続ける。怪物たちとの奇怪な体位の真似をしようとした右足は、釘の拘束に後ろへ引つ張られて哀れ果たせず^せに終わった。膝で棒立ちになりながらにして数百の凌辱——鏡の中の自分は寧ろ大喜びで進んで受け入れているのだが——を疑似^ぎ

経験——。

幻実取り混ぜた快感で脳をぐちゃぐちゃにされている内に、桃色の霞が思考を覆い始める。悦楽に弛んだ肢体の神経伝達が非常に間延びした物になり、噎せ返る幻覚の淫臭を吸い込んだ肺腑が焼き焦がされた。蕩けた心臓に沸いた血を送られる脳は、淫靡な映像に頬を染めて選別処理するだけで手一杯。明瞭な状態など遠い霧の彼方に消えていつてしまう。「あれも凄いわ、恥ずかしい！　こんな所にキスマークをつけられて——」
内腿をさわりと撫でられると、そこに吸い付かれたような痛みが走った。きつと、キスマークも付いている筈だ。

「嫌だ、こんなの嫌だ——っ、あう！」

横隔膜が重力に引かれて急激に落ちていく。そんな失墜の予感と恐怖。憎しみで脳裏を埋め尽くし、光景を遮ろうとしても……、すぐに快感に負けて悪夢へ叩き戻されてしまう。本来、反撃の手段を模索するのに使われるべき脳容量が、少女の淫らな空想に埋め尽くされていく。

（わ、わたしの格好であんなことしないで……っ！！　許せない……あんな……あんな……雄の怪物の肛門を舐めて、愛人の女に椅子みたいに使われて背中に座らされてるなんて……！　どうしてそんなに嬉しそうに尻尾を振れるの……っ?!　ああ、裸の四つん這いで、誰にも触られてないのにダラダラ愛液を流して……売女……!!　嘘……ッ、男の肛門舐めるだけでいくつもり……?!）

——ゾクンツ、ゾクンツツツ、ゾクンツツツ!!

「ひっ、ひいあ……っ！」

偽りの幻像が四肢を突つ張らせて絶頂に至った時、本物のランセリイもまた、激しくのたうった。絶頂に類する興奮を、己が歓喜に屈服する姿に、はつきりと感じてしまったのだ。（このままだったら、わたしもあんな風にされちゃう……?!　いやだっ……嫌だ……っ……!!）

……本当の本当の本当に嫌だっつっ!!!
「さーあ、受けるがいいわ、プリンセス。我が呪詛は、汝の決意を讃え、奮闘を愛で、然る後に侵蝕を以て殲滅せん！　いやらしいことしか考えられなくしてあげるわねえ!!」

——『鏡に映った己に剣を突き刺して絶命している戦士』。

——『寝食を忘れて書物を貪り読み、骨と皮になっていく魔術師』。

「あああああああああああああああああああああああああつっつ!!!」

二つの力に呪縛され、淫らなシャーマンと化して墮落の鏡と交信させられる白夜の半魔像の回転は、まるで四季の移り変わりのように内容豊かで、ノーマルからSMまで、時には目を背けたくなる猟奇趣味までも幅広く網羅している。卑猥な幻想が頭にこびりついて離れない。振り払おうとしても振り払おうとしても、次々と情景が脳裏に浮かび、理性が目眩を起こしている間に肉体は、少女が会得し始めた牝の性の芳香を薫らせる。澱が降り積もって、自分がどす黒く汚されていく感覚。悦楽の脳腫瘍が頭蓋骨の中に増

つふふ、ご褒美にまた挿してあげるけど、四本ぐらい余裕よねっ？」

跳ね馬と化している股間に、またも取り出された四本目の羽根先が当てられた。

からかうように擦られ、もしかもしゃと董色の堅琴を咀嚼するトバ口が歓喜に沸く。汗の雫を散らす尻陵と飾り縁の付いたニーソが、半ブリッジの姿勢を取り受け入れていった。蹂躪の波状攻撃で紅潮し、嵐に煽られる野花の如く震え怯える陰唇が、小刻みな手首の振動を受けた柔らかなナイフを含まされると――ジュブルズツツ!! それが丸ノコで木材に斬り込むようにして膣口に呑み込まれていく。白いタールが大鋸屑の如く散らばり、肢体を劈く悦楽の雷鳴に、拷問舞台の少女は甲走った声で哭き喚かされるのだ。

「きゅあらあ、ああああああっ!! ひがあっ、アっ、ひいっ!!」

額にべったりと貼り付いた前髪の簾の奥で、湖面のように静謐だった蒼い切れ長の妖眼が色欲に濁り、煩悶の大波を幾度も幾度もしぶかせる。幼粘膜から、うじゃうじゃ、と這い出した恍惚の蟲が腰骨を覆い、逞しい顎牙を毛穴に差し込んで愉悦の毒で麻痺させてくる。(たった四本なのに、どうしてこんなに……つつ! 熱い……お腹の中が火傷しちゃううううつつ!!)

膣の中は大渋滞だった。容量過多の羽根箒で掃除される逆向きの肉井戸が、滾々と愛液を湧き出させては柄に流している。勝手に動き回る腰が、腹筋でヴァギナの羽根を締め付けていってしまう。

「はん……はんう……っ!!」

「嬉しいわ、大分私にメロメロねえ？」

その言葉で今更ながらに、自分の体内に侵入して狂わせている物が無機質な道具ではなく、ヴェゾフィアンカの肉体の一部であることを思い出した。蒼瞳から零れる、悔し涙。

「い……や……ああ……っ!!」

――イエーイ♪ 胸はゆっくり揺らして、甘えて相手の指に擦り付けろ。腰は休めないで上体とリンクさせテ……。だめだめえ、硬いよう、自尊心をぐちゃぐちゃに壊してあげないと駄目かナア? 色狂いビッチのあそこを、もっと素直にアピールしなきゃア!

無慈悲に指示が飛ぶ。脇から寄り添ってきた邪鏡精が膝を突いて、見習い遊女に付くお禿となり、動きのぎこちない太股を柔らかな胸のクッションで掬い上げてきた。手に塗った若い牝蜜のオイルで滑らせながら、太腿をさわさわと撫で上げて補佐してくる。

――クフフツ、あの程度がオルガの全てだなんて思うんじゃないよ!

――ここが使い物にならなくなるぐらいクラクラさせちゃうゾー!

「ヒ……イイ……ん……っ!!」

グレイのネグリジェの胸元が、蜘蛛脚となって不気味に這い回るゾフィアの白手袋に、懐いた子犬のように淡く微かな膨らみを擦り付け、三日月のペンダントを時計の振り子にして当てた。赤らみ熟れ始めた青林檎を生地越しにまさぐられ、両肩が快感に酔ったメト

ロノームの如くふらつく一方で、粘稠な糸を引く愛液を羽根ペンに絡ませながら腰が、卑猥な玩具のシーソーに乗りながら上下運動を繰り返す。甘く痺れて今にも頹れそうな少年的な若々しい太股が痙攣している。唾棄すべき醜悪な鏡像そのままに悦楽に翻弄されて。

「ふやはああああ、つく…：…うんっ、ひみい、ひみいっ！ にいいいいいっ！」

「ほら駄目よ、動きが乱れてきたわ！ お仕置きを挿して欲しいのかしら？」

見かねた正面鏡の姉弟子が、蔑笑しながら相方と巧みなダンスを始める。悦楽の呪縛に四肢を繋がれた虜囚は無意識にその動きをなぞらされ、肢体を波打たせた。リンボーダンスじみた羞恥心のない腰つきで、大胆に陰阜を前に突き出してしまふのだった。

「はあい、良く姿勢を立て直せました！ また、ご褒美。ワンちゃんの次は覚え立てのおサルさんになっちゃった悪い子に、餌のお時間よー？」

「…：…やめろおおっ！」

「私が手を緩めることはない。お前がタップすることも。互いの強情の螺旋の果てにあるのは寶石が砕け散る瞬間——！！ もつとも、その前に心が折れて泣き出しちゃうかしら？」

「み、見括る…：…あびやあああああ…っ！」

度重なる凌辱の水管に晒された少女の恥部は、慎ましかった形をすっかり歪め、まるで牡丹のように花開いている。中心からそり立った色素の薄い羽根軸は雌蕊にも見えた。

そこに迫った五本目が、粘った愛液を掬い取り、糊を刷毛で伸ばすようにして、陰阜に塗りつけてきた。薄い花びらを剛の櫛毛が左右に別れて挟み込み、身も心も虜にされそうなマツサージで抜き上げてくる。同時に、間に生え揃ったミニチュアの鉤爪で、今にも破れそうな柔い粘膜を掻き塗り、恍惚で甚振ってくるのだ。

「はっ、きやおおおとおおおおおっ！ ひあんっ、くゆ…：…っ！！」

痒い。熱い。逞しい。コシの強さに女体の芯まで痺れ切る。少女の發育途上の体軀には強烈すぎる、白い肉が蕩け落ちそうな快感。細毛一本で小さな女性器を弾かれるだけで、壮絶な波濤を浴びた四肢関節が緊張で固くなる。華奢な手足が破碎寸前にまで突っ張っていく。それが羽毛の本数だけ無数に行われるのだ。白目を剥きかけた少女は露と形容するにはあまりにも異様な、緩んだバナライスの如き愛液を止めどなく花卉に流れ伝わらせたことだ。

「あがつ、かつ、はっ、はみゆうううあああああああああああつ！！」

執拗に女性器を苛み続けるゾフィアが、早くも濡れそぼった詰問矯正器具を股間に添えてくる。少女の腰が、ぶるりっ、と大きく痙攣し、蒼腫が恐怖で見開かれた。開いた赤い亀裂から鍾乳洞の鍾乳石のように、コールドール状の愛液が無数に垂れる。正面鏡の偽物が期待を隠そうともせず両脚を開き、本物もそれにつられてしまう。快楽の拷問吏によって容赦なく挿し込まれる、青紫色の攻撃的な形状をした光沢。——グヂュツツ！！ 小振りなお尻が歓喜で跳ね踊る。ランセリイは蛙の断末魔のような無様な嬌声を喉から迸らせた。

「ほううら、見てご覧なさい？ 大層な口を叩いていた自分の感じ具合をねーえ？」

束から引き抜かれた一本が顕示された。少女の体温を啜って湯気を立てるソレから、接着剤のように粘ついた真つ白な蜘蛛の巣が糸を引いている。もう一度元通りに刺されると、膣の咀嚼でペン先達が激しく動き回っている所為で、すぐに他の物と区別がつかなくなる。

「くおぐおお……いやああ……見せ、るなあああ……かキユあああああつっ!!」
ランセリイの瞳の焦点が危うい。

「ずうううううつつと、そのままハムハム続けて、耐えきれらう？ もうこつちのお口は、自分が鳥の餌がお似合いの淫乱な雌豚だつて声高に叫んでいるけれど！」

紅眼を興奮させたゾフィアが、股間から突き出た羽根。ペンの頭の一つ一つに指先を乗せていく。その途端、乱雑な運動に一つの指向性が齎された。てんでバラバラに動くペン先の筆記部に妖艶に掌を添えて纏めて握られれば、卑猥な意志で統率された穂先達が魔性の虜に堕ちた膣で激しく肉版を刷り上げてくる。

「ふひあつ、やだつ、やだなのおおおおおおおつっ！ 止まって……腰……止まれえええええつっ!! はうつ、んあううう……！ そこつ、擦れ——え——つ！」

「ハアイ、もう少しの辛抱よー、もう直、エンドにしてあげる！ 私って、相手が鯨さんになつてくれないとイかせた気分にならないの。これも、きっちり覚えて貰うわねーえ！」

束になって一匹の巨大な毛虫の如く、狭隘な女洞で密集した青紫の光沢が、暴走の止まらない幼魔の腰に潮を噴かせようと目標を定めて襲いかかってくる。盛り上がったGスポットの膨隆粘膜に釣り針を引っ掛けられ質量任せに凹まされると、その天井裏にある空洞——膀胱に不穏な未知の快楽が立ち籠めた。幾本もの濡れ矛のエッジで膣壁の向こう側にある尿道をなぞりながら擦過され、泌尿器に僅かに溜まっていた臭いのきつい液体が沸騰。アンモニア臭気の漏れ出た排泄管に、何処から滲み出たともつかぬ得体の知れない愛液が満ちていく。

力を込めて奥を上下に揺すられると、子宮口付近で起きた毛触りの大合唱が尿管に響いてきて、まるでもう一本ヴァギナが通っているかのような灼熱の疼きに尿道が嘔び泣く。

「っひきつ、くひイいいいいいっつ！ は、はハあああつ……はじ、めてつ、オ……見せ……あ、相手つ、ぐらい……選ばせ……て……よ……きゅぐあが……っつ！」

膣すらも暴発しそうな快感だ。火薬をギチギチに詰め込まれて、ニトログリセリンを流し込まれる様な。女洞の中でそれらが粘りきつた愛液と混ざり、コンクリートを掻き混ぜるような重量感で少女の快楽神経を追い詰めて行く。なげなしの軽口が封じ込められる。

「っひいいいいいいいっつ！ きゅつうううううえあええエっつ!!」

「そんな権利はお前にないわ。許されるのは命乞い！ 靴底に踏み躪られて笑顔を浮かべ、水芸で強者を愉しませて歓心を買おうとするの。鏡の中でしていたのと同じにねーえ!!」

凄まじい拒絶心の柱が少女を串刺しにし、肢体を石のように硬く強張らせる。だが、そ

の高まるラブジュースを奥に封じ込めることである。

「わ……わたしはあああつ、シェリスみたいな、マゾじゃないいい……つつ!!」

ちっぽけな舌先からの些細な刺激をすら食欲に味わおうとする肉体に、心が引き摺られてしまう。度重なる凌辱者の手管に心の防壁を剥ぎ取られ、孤軍奮闘を続ける少女は一個の爆弾へと変貌させられていく。紛れもない少女本人の物である肉の歓びは、永続的に続くこの快楽を享受して歓喜の咆哮をあげていた。

「そうね、もっと酷い性癖がありそうだね。まずは大嫌いなそれと同じ物体に堕ちなさい？ イヤらしい自分を好きになるの！」

「やめ、えええええつつ……こわれるつ……からだがかわれるううう……つつ!!」

魔物喰らいの指が七本の筆軸を易占いの筮竹のようにデュプラデュプラと掻き回す。泣きじゃくる少女の膺を羽毛のタワシが擦り上げた。凶鳥の掌の、お手玉を放り上げては受け止める手付きそのままに、凋落した魔少女の肢体が掻さぶられ尽くす。

——ヂュツチャ、ヂュブツツチャツ、ヂュグツチャアアアアツツ!!

容赦なく詰め込まれていく快感の炸薬でパンクしそうな身体を更に、灼熱の渦に叩き込まれる。享楽の淑女の指に操られるミキサーが少女の導火線を急速に短くしていく。

「んおつあ、はああああああつ!! あ……あ……あ……ひゅ……ひゅ!!」

後頭部で両腕を組まれた少女は、肘で白瑩の角の根元をぎゅつと挟み、ただただ腰を振り続けた。四肢を固定され一切の裁量のない肉地獄。ひくついて開閉を繰り返す尿道口が焼け火箸を突っ込まれて掻き回されるような快感に嘔び泣く。雫のお玉杓子が一滴漏れる。

「んあ……んかはああああ……!! ひゅガウオオオオオオオオオオツツオ!!」

限界を超えた頭が強制的にブレーカーを落とし、一切の抵抗をゼロに。昂ぶりきった肉体が理性の軛を脱し無制限に快楽を貪り始めた。身体機能から切り離された意識が淫欲に染め上げられていく。「んう……!!」と舌を鏡に押しつけ、カチンと八重歯をぶつける。

——ジュグチツツ、ジュグズチツツ、ジュグブヂュヂュウウウウツツ!!!

何度も荒波に放られてから、一際高く放り出される感覚。

「な、何か来る——ツ! はううつ、あはううううううううううつつ!!」

切れ長の蒼い瞳が溢れる涙で厚い膜を作って行く。盆の窪が女の肩に押し付けられる。

——ジュボオオツヂュヌヌジャツツツ!!!

(もう……っ……無理いい……限界いいいいつつ!!)

その口が無音の開閉をし——。

「つああああああああアアアアアアアアアアツツツ!!!」

グンツツと膝が角度を狭め、卑濡れ羽に子宮口を押しつけ抉らせた。腰を捻り膺壁を擦り付ける。血走った女洞粘膜に、石鹸をたっぷり塗り込めタオルで摩擦したかのような泡が立つ。炸薬庫に引火——、ヂリツと子宮口にスパークが走り、全身が木っ端微塵に吹き

気の乗った淡雪色の裸身に振り切られてずれる、胸から腰までを包む胴腰一体型のネグリジェ。グレイのカーテンの中で尖った乳首を上に向けた儂い隆起が、汗で吸い付く黒い涙滴型のブラを息苦しげに押しつけたがっていた。すでに足腰が立たなくなる程感じ入っているというのに更に膝立ちを強要されているウエストは限界を超えていて、よがりくねって見えざるフラフープを回している。鉛直上方を向いた羽根に、斜めに傾けた窪洞窟の天井のGスポットを激しく擦りつけ、一個の発電機と化して初な女の芯を痺れさせていた。

「アツハ、開通おめでとう！ お赤飯を炊く代わりに出を良くしてあげるわねーえ！ こりこりな神経密集地帯を甚振れば、あら不思議、衰え知らずになっちゃった。病みつきになるぐらい癖をつけましょう!？」

——ジュブツルボツ……ドピュン!! 又ヂユリ……ピュバシヤアツ!

未知の機能へと開眼した女陰に激悦が走り、蟠っていた残尿感が更なる墜圧に呼応してピュツピュツと吐き出された。直に入ってきた長い指に、直接Gスポットを揉み込まれたのだ。

「みぎゅん!! さわ……つ……ふなあああん! イきゅつイきゅにいいいつつ!」

己の意志に背いた断続的な間歇泉に、尿管を楽園への直通トンネルにされ、迸る歓喜に腰砕け。薔薇色に輝く幼い女陰が苦しげに収縮し、育ちきった肉芽がブルツと爆ぜる。

(生暖かい指いいい、変な動き方されてる……感じ……るのおっ!)

外から見れば、頭の後ろで手を組んで衣裳の腋の下を覗かせた少女は、鎖骨から下にすっぽりと肌着を摺り落とし、漆黒のブラジャーを覗かせている。

「ふああ……あ……うあ……くう……うあ……ふあああああ……つ、うう……!!」

数回、潮の絵筆を振るい——、虚ろかつ幸福そうに焦点を霞ませて、強情な蒼光を湛えていた筈の瞳がトロンと澱む。それは魂を翔ばした者だけが見せ得る弛緩し切った顔だった。

「あ……あ……ああ……!!」

くつてりと垂れた華奢な体躯が、ふらふらと銀冠を左右に揺らして朦朧とし、甘く粘っていた水飴の如き涎を垂らす。背後に突き立った銀の長剣と共に、長辺のなだらかに窪んだ直角三角形を描いている。今の彼女は倒れることすら許されない。落ちっ放しになっているショーツには愛液が溜り、白濁のオイル海に浮かぶ黒い諸島といった有様になっていた。

——す……すご、い……これが……潮を噴く本当の絶頂……。

暫くして、散らばっていた自我が少しずつ戻ってきた。

「はあ……あ……あつく……」

腰から下の感覚が失せている。ただ快楽を肉体が受け入れてしまったただけだ。敵に媚びた訳でも、命乞いをした訳でもない。なのに、この敗北感はどうしたことだろう。

「ふふふ、ご満悦のようねーえ?」

煩悶していると、後頭部を白手袋シヨータイが掴んできて、顔が正面の鏡に押しつけられた。精根尽き果てて気丈の糸がぷつぷつと切れてしまっている彼女は、訳も分からぬままに惰性で従い、「んう……う」と舌を突き出し、寄り添わせて、透き通った恥辱板を舐め上げ始める。「初めてアーチを描いて達した気分は、どーお？ 皆、それを知ってたがっているわ？」ピチャピチャという湿音が鏡面を叩く中、少女の向かいに映った偽物の嘲笑が深くなる。嫌味たつぷりにランセリイと鼻梁の位置を合わせ、頬の横に両手を突いて、淫らがましく舌使いを合わせてきた。まるで波をぶつけ合うかのように互いの桃色媚肉を重ねてガラス・ペッティングを繰り返させられている内に、身体の奥底の燻りを再び引きずり出されていく。

「あ……ふああ……つ。……い……ひつ……言うもん、か……ああ……」

「まあ、そういう反応になるかしら？ お前は無知で、鈍どんくさいのなもの」

意識を必死にかき集める少女に、ヴェゾフィアンカが忍び笑うと――、

「……うむうっ?!」鏡に押しつけた唇に不意にぬっとした物が触れてきた。ランセは首を引こうとしたが、叶かなわない。気がつけば、向かい側の淫蕩な自分がこちら側に身を乗り出してきている。紛れもない実体となった手首を、湖の表面のように波紋を広げる鏡から突き出して、自由の効かないオリジナルの頬を挟んで桜色の花卉を奪ってきていたのだった。「ふああっ、は、はなっ、ひえっ！」只ただでさえ煮立った頭が酸素不足で熱を孕み――。

――面白い能力をコピーさせてもらっちゃタァ♪

「――ッ!!」そして臆おぼろげ気な視界の中で少女は見た。周囲のランセを模した邪鏡精たちが自分くすりゆびに薬指を向けるのを。きつとそれは知識を吸収するのではない、注入するため――。

――ドプツ、ドプツ、ドプツ!! 環指かんしが突き立てられた。薄い胸に、絶息する喉に、角の根元に、弾む腰に、眩い太腿に、柔らかな脹ふくら脛はぎに。革靴を貫通して足の裏にさえ。

「む、ふむうううううううううう――ッツツ!!」

くぐもった声を漏らし、密着した己の唇で強くドッペルゲンガーの唇を噛む。すると、水の中から見上げたように揺らぐ視界の中で意地悪な写し身の蒼眼が、残酷無比な愛嬌を振り撒まきながら釣り上がって見せてきた。

『――堕ちるんだよ、性奴隷せいろいに相応ふさわしく。お母さんの世話は、わたしが引き継ぐからさ!』

(や――頭の中に入ってくる……!)

シェリスエルネスの知識を吸い取った時と同じ感覚。絶頂で真っ白になっている頭に強制的に卑猥な情報を転写される筆舌せつに尽くしがたい感覚がし――、

「ふぎゅうつム……!! みゃぐううううううむつううううつつ!! ふはあっ!

わたしはヤラシイ雌豚犬猫です――!! もっとプツシーに餌頂戴とうていいいい!!」

到底とうてい自分の物とは思えない卑猥な口を衝いて出たことだ。

「女の子だもの、傷痕は残さないでにおいてあげるわねーえ?」

ゾフィアの鴉翼がランセリイの肢体をさっと撫でる。すると、用の済んだ黒い孔が肌から痕跡を残さず消えていく。しかし、どす黒い負の情念に汚された魂が癒える訳ではない。(やだ、頭の中でヤラシイ言葉がぐるぐる回ってる——！ 嫌なのに……許せないのに……っ、恥ずかしいこと一杯考えるの、気持ちいいよおとおお!!)

「もう一度聞くわあ。私の手管技巧のお味は如何だったかしら？」

伏しそうになった耳を撫でてくる瀟洒な白手袋を首を捻って振り払い、剣呑な気配を感じて周囲を見回した少女は、この快樂地獄の計り知れない深淵を垣間見て、慄然たる衝動に全身の産毛を逆立てた。鏡像の拷問吏たちがそれぞれ一本ずつ、ランセリイが瞳に突き込まれているのと同様の羽根ペンを握っている。そして自分たちの愛液で適度に濡らしながら、その拷問具の効力を發揮させるのを今か今かと待ち焦がれていたのだ。

——応用練習のお時間だい、清純ぶったお嬢ちゃん！ 教えた言葉を利口に使って、具合を聞かせておくれヨウ！ 上品マ○コの昇る感覚なんて、あたいら分からねくいつ。

——決まってるじゃーん、ジャムメーカーが破裂しちゃうぐらいヨくて、子宮口開きっぱなし、梨色の牝汁が駄々漏れなんだって！ 淫乱仲間なんだから感覚だつて同じサア！

——ねえねエっ、この身体で潮噴きってどんな感じ、どんな感じい?! 出す時お尻の穴をグリグリッてしたら、もつと気持ち良さソ!!

「ど……お……どうして……そんなこと……言わなきゃならないの……っ！ ツ——ひがああああああああつっ!! ひぐあがあああああああああああああつっ!!」

——ズブズブズブズツツ!! 凌辱者たちのお気に召さない返答をした愚か者のキティ・ポットに、数えるのも馬鹿らしいくらい大量の羽根ペンが突き込まれた。

「……イイイ……ツ……ん……!! ふく……うううウウ……ツツツ!!」

「言わないと、もつと羽根ペンを増やすわよお？」

「ア、ガアアアツツ、————ひ……ひわないいいつつ!!!」

——ドスツ、ドスツツ、ヌブユルツボヨヂユツツツ!!!

「フ————ツ、あぎやファオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!」

雪崩打つ暴虐から庇おうと、ランセリイがへっぴり腰で後ろに向けた陰阜の割れ目へと——、背後の真打ちが魔法使いの鮮やかさで二本、ヴァギナを虐め抜く為の拷問具を指先に生み出した。逆さにされて羽毛の方を先端にされたダーツが零距离から振りかぶられ、そしてソフトボールのアンダースローじみた手付きで突き刺される。

「お利口になりなさい？ 愛嬌のある所を見せてくれないと……お！」

「ヒイ————イッツ!! ヒュギイイイイイ————ツツツ!!! もう、やあああああつっ!! もういやあああああああああああああつっ!!!」

永続的に嗤う受動搾悦器の山盛りを、慣れない秘苑を精一杯開かせて呑み込んだ幼い女洞の牝肉が、縫合され包帯を巻かれた切開手術の傷痕が治癒に蠢くが如くジクジクと

熱を持つ。気も狂わんばかりの痛痒で颯り抜かれていく。

湧き上がる快樂の大合唱に全身でしゃっくりをあげる少女。陰阜から生えた無数のペン先に手套の指が絡みつき、肉筒の中で再び気の振れそうな抽送を始める。毒々しい桜色の靄に思考の経絡が侵されていく。積み上げられるだけ積み上げた防壁を全て破壊された彼女に、もう抗う術はなかった。邪鏡精らによる、真っ赤に紅潮した喉へ殺到する擽りと、尖りの痙攣する耳介へ押し寄せてきた甘い吐息とに、促されるままに正直に答えさせられていく。

「わかん、ない……わか……ん、ない……っ……頭の中が真っ白になって……脚、閉じさせてえええっつ、恥ずかしいいいいいいっつっ！」

その瞬間、彼女の存在は墮落を憎む潔癖な糾弾者から、出来の悪い新参者へと転落した。「呆れた物ね、知ったかぶっていたなんて。お仕置きに一から仕込んであげるわ？」

頭が真っ白になった子供に卑語を教え込む事は豆腐を崩すよりも容易い。まずは発声練習だ。窄まった菊門や渦巻く耳殻に押し入ってきた媚教師達の舌と唇が、あーうーと淫音を注いで若肌を悶えさせる。赤子の舌を指で動かして言葉覚えさせるようなものだった。

——アム、プアチュムツ、ここまでしてあげてるのに言わないか、言わない力あ♪

——悪い子だっ、悪い子だあ、お仕置きっ、お仕置き！

脳に描いたダンスの軌跡と四肢の振りが一致すると恍惚が襲ってくる。舌の根元が調教とリンクさせられ、『本来の自分』が解放されていく。淫乱な理想像に身を委ねる喜びが、僅か二日にも満たない魔少女の生涯を蹂躪し尽くした。

「ヒイ……ッ！ らしっ、おもらし、ひゃいこむっ、らったあ！ のに、おひり足りなかつたよお！ ひゃっく、みい、ぷりいず あすほおおるっ ひゅきいいいっつっ！」

「こおされると、とっても熱くなっちゃのよね？」

ドレスを半脱ぎにしている状態で完全に引け腰になった開脚姿勢の付け根、恥液を電飾の如く纏った生きた樅の木が巨体をねじ折り、臍孔を穿つ。すると少女の寸法の小さい胴体が、まるで巨人に握り締められたかのようにビクビクと痙攣。

「ふ————ッッ、んおおおおおおっつっ!! そ、そう、熱い！」

混沌とした思考が誘導されていく。唆されるままに魔少女は肉の猛りを口にする。

「イイ——ッッ!! もつとスジを捲って塞いでええっ！ ファック・ミー・プリーズッ！ トロロ汁止まらないナメコま〇こを潰して戻らなくしてえええっつ！ にゅるっ、ひゅニユるう！ って、は……ハめ、ハめまくってえええエエツツ!!」

「これがトロロお？ 少し控えめに言い過ぎじゃない？ 和洋折衷もいいけれ、ど！」

懸命に姿勢を維持し続ける漆黒のオーバーニーを履いた脹ら脛や腿に抱きついた数人が、巧みな指圧で下半身を疼かせる。ランセが脱力して腰をストンと落としてしまうと、複数伸びた腕が椅子となって支えてきて、淫語洗礼の羞恥で紅葉のように染まったお尻の柔肉

「今の状態を言っでご覧なさい？」

「き……きもち……いひ……ひおをふくによの、りやいもひやおお……」

後から後から湧いて出る唾を飲み込み、少女が空腰を振る。浜辺を砕く津波の如く襲いかかってきた陵辱で真っ赤に茹だつた肢体を、小型の羽根箒たちに弄ばれる。卑猥な教導者連に黒衣から滲み出た汗で淫らに濡れた、湯気立つ手を見せられて、可憐な羞恥で頬が染まったことである。

「可愛いわねーえ。相手の勢いに負けた成り行きじゃない、本心から今みたいに屈服できるまで……、殺してあげるわあ、ランセリイ、何遍も何遍も!!」

深い官能で奥まで痺れて身体が上手く動かせず、「う……つうう……」と呻き、淫牢のソファーに深く腰を沈めたまま煩悶する少女。クスリと艶笑を浮かべた淑女が被せてきた掌にうなじをあやされて、「あ……」とペットのようにな身を震わせてしまう。絶頂で酩酊状態にある所を、まるで新入りをやつかむような古株鏡精たちの執拗な愛撫に甚振られて、力なくヘドロの中で藻掻かされるのだった。

漸く拘束から解放されたランセリイは、ドンと背中を押されて突っ伏す。

「ほうら、自由になれた。反撃してきていいわよお？」

「は……はあう……はん……はんうう……!」

だがしかし、長時間姿勢を固定され続けた肉体は、すっかりガチガチに固まっていて直ぐに機能を取り戻す筈もない。それどころか基本的な生体プログラムすら媚獄のプラネタリウムで破壊された四肢は、身の使い方を忘れて奇妙な卍を描き、地上の平泳ぎを繰り返す。

——懲りたかい、お嬢ちゃんっ。もう綺麗な身体には戻れないヨウ！ これからは、あたいたちと共同生活するんだヨウ！

「ひ——ひあっ!!」

邪鏡精たちの羽根ペンに全身をさつと撫でられて、肢体を恍惚が襲った。途端、快楽に感電することこそが本来あるべき姿だとしても主張するかのように、乱雑だった躯の動きが統一性を取り戻す。関節や筋肉が自在に解れて性の刺激に花咲いていく。半脱ぎの肌をギザギザの縁で梳かれると、まるで糸を振り回される操り人形の如く壊れていた少女が、次々と繰り糸を断ち切られて脱力し、口元を押さえて胎児のように丸まって狂おしく内股を擦り合わせてしまうのだ。その様はパズルのピースがびたりと嵌る様を彷彿とさせる。

「あららあ、折角チャンスあげたのに、自分が救いたい淫乱だと行動で白状してしまつたわねえ。クフフ、なあに、そのザマは！ おしやぶりは、ここには無いのだけど!!」

不吉な微笑みを湛えて、立ち上がったゾフィアが離れていく。昂ぶりが一向に引かない。

「ハアアア……ハアアアアア……ツツ！」

——まだ……足りないイイイ……

幾度となく達したというのに、そんな漠然とした飢えが、ますます体内で膨れ上がって

いた。瞼の下を快感で赤く腫らし、何かを探すように青紫のゴシックドレスを嘗め回した奴隷は、ある一点で視線を止め、自分が何を求めているか悟って栗蜜色の恐怖に打ち震えたことだ。

「ハアイ、お肉のビスケットを、ご所望？ 光荣だわあ、『三千世界最強の魔性の美少女』のそんな物欲しそうな顔を見せて貰えて。それとも、ぶつとい黒パンの方が良いかしら」
「いやあ……」

つ、と爪先立って寄ってきた淑女に、上から覗き込まれた時の、己の蚊の鳴くような声に彼女は驚いた。操られてのことではない。つまりこれは、如実に現在の自分の状態を物語っているのだ。(欲しい。欲しい。ホシイ)。曾ては拒めた物を肉体が切実に求めている。

「あげてもいいけれどーお。ねえ、教えたはずよねえ？ こういう時は、どうするの？」

意地悪く腰で蛇頭の尾を隠しつつ、気を持たせるように内向きに寄せられた太腿が、そのまま屈もうとしてティルフエザーズ・スカート（鳥の尾羽風のスカート。フロントの途中から後縁までを斜めに断たれていて、正面から見ると太腿や脚線が覗く）の前縁を押し上げる。古来より、魔界の貴婦人が腰穿きを広げる所、倫理を蝕む瘴気の風が吹くものだった。それに違わず、犠牲者を蠱惑するドレス・アクティングが開演する。

内部に仕込まれて裳を膨らませている骨組みは、腰のベルトから縦骨として、星啄鴉の巨大な尾羽を放射状に並べた代物だ。裾のヘムラインが後ろへ傾くように長さ違いに揃えられたそれらの間を、竜呑み鯨の漉し髭を加工して作られた幾本ものスプリングの横骨が、ほぼ等間隔に円形やU字のカーブを描いて並んで繋いでいる。

鳥籠型の亜流な形状である。泣き虫を幻弄しようと左右にリズムを刻むヴュゾフィアンカの潇洒なレグラインを取り巻く横骨達は、直径の小さな順に上から並んでいて、縦骨などから掛かる力の加減に応じてスプリングが開いたり縮んだりする柔軟な構造であった。

「アッハ、魔女の花壇には鎧を纏ったお花が一輪。屋敷に上げて頬を撫でてあげれば、荊の衣が脱げて裸で震える少女が一人。ベッドに連れ込んで一緒に座る頃には、鼻先を押しつけてくる淫らな牝の仔豚ちゃんが一匹！」

仰々しくスカートの輪郭を形作る、底の抜けた鳥籠の中で、陰阜から地続きのふしだらな脚線が誘うように身を振る。(アレで挟まれたい……潰され……。じわじわと屈服の涙腺を緩めながら床から見上げるランセの視界の中、前縁から覗くスカート内部の翳の奥、肌を覆うヴェールめいた艶めかしいストッキングが膝同士を擦り合わせれば、内側から力を受けたスプリングがキシキシと拷問器具の蝶番のような不吉な軋み音を立てた。そうしながら撓んで開いていき、鏡床への悪鬼の着座に合わせて自身を変形させていくのだった。

——ギシ……イリ。

おどろおどろしい重奏音が、乱暴な蹂躪を求める魔少女の腹の底に響いてきた。

ヘッドドレス
ヘッドドレス
頭飾布の淡紫の羽飾りと耳元からの銀の編み髪を揺らし、獲物を喰らうべく地に降りた凶鳥が尾羽を伏せる。腰を下ろそうとされて床に触れたクリノリンの後端も、前縁と同様。

鏡面で、縦骨である尾羽の先端が折れ曲がる。盾に当たって滑ったフェンシングのフルーレのようにしなつて鯨髭のスプリングたちを引き延ばし、内側から外側へと裾々しい美しさを伴つて開いていくことである。

「さあ、ピギー。飛び切りの御馳走と豪華なテーブルを用意してあげる。だけど、手掴みで頬張るなんて不作法な真似は、させないわ？」

「……………ふ……………フ……………アウウウ……………つつ。」

カラカラに干上がった少女の濡れた視線が狂おしげに、前縁を沈めて内部すら覗かせなくなつていくオープンフロント・スカートの表面を撫で摩つていった。その間にも、床に押しつけられる 瑠璃紺の円錐は、あたかも朝顔の花や喇叭の口を逆さにして床に伏せたような傾斜を生じさせて、裾を広げていくのだった。まるで地に吸い付いて接吻をするかのように。

ノの字に曲がる尾羽らとゾフィアの穿いているサーキュラー・スカートの裏地、ピシツとしたプリーツの谷底は、空戦機動を勘案して布のリングで一体化させられている。そして、彼女のサーキュラー・スカートは、元々、中心の空いた円形の布に末広がりの折り襷を入れて畳み、円錐形に整形した物だ。その為、自在湾曲式クリノリンの下部が直径を広げれば広げるほど、プリーツの谷から隠し布が引き出され、床に触れた生地が引き裾のように広がつて——特に後縁の部分が——、元の円輪状へと戻らされていく。

（あ、あんな風に——、わたつ、わたしも、床に押し、つけられた……………いつ！）

「ねーえ？ お前だって、もつともつと情緒が欲しいわよねーえ？ たらふくの絶望の中で味わう絶頂は、きいっと、格別に甘美なことだわよー？」

今にも蹄を踏み鳴らし出しそうな餓えた双角獣の鼻先に、絶対君主の白手套が差し延べられる。すい、と小指が立てられ、腹を見せて来つつ、口紅を引くような仕草で横一文字。おあずけの仕草に少女は身悶えさせられた。そのままシャッフルしたカードを引くような手付きで翻り、強欲な視線を惹き付けながら、ひらひら、と両掌が翳される。淫心を煽る蛇の交尾じみた卑猥な動きで指同士を絡み合わせつつ、胡乱な軌跡を描いて舞い降りる。今ではすっかり伏しきつたスカートの生地、そこに盛り上がった膝の上に緋手が添えられた。そして、妖しく絡めた両の中指を、膝の間に上から押し込む戯けた仕草で情交を想起させて、堕ちた暴君の渴望の炎に油を注ぐのだ。

「つ……………あ……………ん……………！」

ズヌリと突き貫かれたかのような衝撃がランセリイを包み込んだ。咄嗟に強張つた悪魔尻尾の根元が、ふるふると震えてしまう。牛が闘牛士に赤い物をちらつかされ興奮を焚きつけられるかのように嘲弄されて、媚宴の掌中に嵌つた性奴隷は我知らず腰を浮き沈みさせることだ。

「うふふ、どう魅せてくれるのかしらー。最高のテーブルマナーで私をバッド・トリップ

させて。さもないと、その渴きは永久に癒されなれないと思いなさいねーえ！」

そうやって膝を崩して座った葦の淑女が、ポンポンと腿を叩いた。その腰の後ろから、横腹を通って腹部に這い昇ってきた緑鱗の毒蛇が鎌首を擡げ、脛を両脇に控えさせた平らかな眉間を前方へと差し出した。お手を求めるように瀟洒な太腿の間で頭部を屹立させる。

男根に見立てられたそれに――、

「あ……あう……くあ………」

色情に駆られた少女の肉体は敏感に反応する。ゴルフドライバーの先端状になって待ち構える、ボウリングピンの持ち手形の物体を見るだけで下腹部が疼く。自分からヴァギナの羽根ペンを喰い締めるようにして、少女は四肢に力を込めた。荒ぶる欲求に逆らえない。どうすれば良いのか、躰はどうに済んでいた。今や淫靡の大書庫と化した頭を浅ましい欲望が性急に引き回し散らかし、がつつきながら一つの行動を選び出す。

「これは……操られてるだけ……そうされたから、そうにやってるだけええ……」

「上手い言い訳ねーえ！ だけど私は淫らな行動を刷り込んだだけ。やっっているのは自分自身よ。他ならぬ、お前の肉体が欲しているからこそ、そんなに短兵急に事が起きるの！」

クスクスと周囲から押さえた嘲笑が沸き上がる中、ふらふらと腰が浮き上がる。両膝を突き、両手首を囚人の如く腰の後ろに重ねて並べた、屈従を示す恭順ポーズ。身体感覚が皮膚一枚ずれたような、自分の身体が他人に乗っ取られたような感覚。乱れた衣裳も直せず結局膝立ちに戻された少女は、自分の流した汗や愛液をニーソックスの膝で塗り広げながら、吸い寄せられるが如くエメラルドの悪魔の棍棒にいざり寄っていく。まるで袴を穿いた時代劇の奉行が罪人に詰め寄るように。立場こそ逆であるが。

「う……うう……お、おおおつ、お前なんか……お前なんか……こんな格好お……！
こんつ……ナ……かっこ……おおつ！ つぎ、つぎいいいいいつつ！」

「すぐに抵抗する気なんて失せるわあ。心が肉に従うようになる……！」

墮落の操り糸に要求されるがままに、緩やかに微笑む陵辱者の前に引き出されたランセは、そして水を飲む獣の如く頭を下げていった。

「あ……あ……」

半開きの唇が誘惑の蛇に近づいていく。喉がゴクリと唾を飲み込み、胸が速鐘の如く鳴る。早くも咽頭が熱を孕み、どこでもいいから突いて欲しくて堪らない。他人に乗り移って動きを見ているような浮遊感の中で最後の抵抗と、蛇頭のルビーじみた紅眼と暫し睨み合った。が、あえなくヴュゾフィアンカの分身に接吻させられてしまったことだ。

（う……鱗が、硬い……凄いな、わたし……初めての時、こんなのに犯されたんだ……
……こんなのが……ま、またわたしのの中に入る……ッ!?)

征服されていく。凶暴な破壊力を前にして魔悦に魅入られ気概が萎まされていく。八重歯が緑鱗の表面を擦り、精一杯開いた桜色の唇が、忌まわしい蛇を頭から呑み込んでいった。

しら！　ほうら、仲良く記念撮影しましよ。見なさ——ん？」

そして、散々駈るのに使ってきた正面の鏡に自分たちの姿を映して眺めようとした陵辱者の表情が、翳った。いつのまにか、その中で立場が逆転している。ゾフィアがランセリイに抱き締められ、魔少女の影から溢れ出した触手で陵辱されているのだ。

「まっ、まああ……っ、周りを見てみる、ヴュゾフィアンカアア……!!」

「やゝあよっ、目を逸らした隙に何をされるか分からないもの——っ?!」

そう答えつつ素早くちらりと周囲に気を配った銀髪鴉翼の魔女の瞳が、愉悦混じりから一転、剣呑に鋭く尖らされた。それまでおとなしく享楽と猛毒の淑女に従っていたお禿の邪鏡精たちが、ニタリと悪意に満ちた笑みを浮かべている。いつの間にか羽根ペンの代わりに一振り携えていた長剣を逆手に握り、スキーのストックよろしく振りかぶっていた。

「……ぐっ!!」

両腕を獲物の身体を押さえることに使っていた彼女は反応が遅れる。ザグザグザグツツと、楽しみに夢中になって警戒を怠っていた背中に銀の鋒鉞が突き立てられる。

「か、鏡だろうが何だろうが、絶対に捻じ曲げられないわたしの本性を教えてやる……っ！　月光の幻焰は誰のものにもならない……!!　そんな物の写し身になったから、せいっらも狂ったんだ！」

幾本も胸から金属板の杭を生やすゾフィア。ランセリイの言葉を肯定するようにドッペルゲンガーたちがタイミングを合わせて、それを引き抜き、もう一度——。

——グサグサグサグサツツ!!

「………ぐううっ、アガ……ツツ!!!」

ガバアッ、と血を吐いた淑女を全身を使った体当たりで突き飛ばし、ふらふらと立ち上がった少女の右革靴が、タッ、と決死の覚悟で床を打ち叩いた。憎悪に沸き立つ昏い魔影から鯁肌の触手が溢れ出し、腿まで覆って漆黒の奇怪なブーツを形作る。膝の脇に飛び出したスコップ・ガード、鈍重そうな蹄鉄型の踵、角と見紛うばかりの野太い鉤爪。底には鉋打ちのスパイクが付いた、サウルス・グリーブ。優に自分の重量の十倍を超すハンマーを装着した右脚をもう一度振り上げ、恨み積み重なる陵辱者の頭部へ目掛けて叩き墜とす。

——ゴガツツ!!　足裏に硬い頭蓋骨の感触。土踏まずを軸に、ぐりぐりと踏み躪る。

「死ね……っ……死ねえええっ……!!」

だが——。

「——お、す、わ、り……」

全身を青い血に染め這い蹲らされた女の、脚甲底に隠れた貌が、顛顛を棘に挟られながらクスリと笑い、垣間見える唇から毒々しい言霊を紡いだ。それにニーツックスを撫でられた途端、猛威を見せていた竜牖が迫力を失い、留め金の外れたコンパスの如く、ぐらりとよろめく。

